



アトリエ・センターフォワード 第19回公演 上演台本

風の上で眠る

作・演出 矢内文章

2024・7・3（14

雑遊（新宿三丁目）

『風の上で眠る』

登場人物

鴨志田 憲司……産廃処理場作業員
雉本 隼人……鴨志田の同僚で幼馴染
中鳥 吉鷹……リストラされた会社員
鶴田 夕……セクハラ被害者の劇団員
鶴野 道子……地元の主婦で鶴田の姉

時 近未来。2035年の夏。

場所

とある片田舎の無人駅「峠下駅」のプラットホーム上が舞台で、古びた4人掛け程のベンチがあり、その上に小さな日除け屋根がある。その周辺に駅名の看板があり、上手方向が「峠入口」駅で下手方向が「峠中」駅。また、駅名の看板の横に小さな時刻表がある。立地の設定としては、舞台前方（客席側）に単線の線路があり、その先には雑草だらけの荒れた畑が広がるなかにポツポツと民家が見え、その向こうは山という設定。舞台後方側も似た設定ではあるが、こちらのほうが山は近い。

主題歌『風の上で眠る』
作詞 矢内文章 作曲 高崎真介

きみの背中が小さく見える
袋小路で震えて見える

道が分からなければ
ぼくも一緒に探してみるよ
一歩踏み出すならば
すこし後からついていくよ

晴れた空もあるのだと
決してひとりじゃないのだと
分かってくれるまで
あきらめない

それまでぼくらは、風の上で眠る
だからぼくらは、風の上で眠る

プロローグ

穏やかで楽し気な音楽。

農作業帰りか、地元の主婦・鵜野道子が来て、線路の先を望み見たりしてベンチに座る。

音楽が虫の声に変わる。

鵜野は持っている袋からキウイを出して素手で皮を剥き、見つめる。

鵜野

キウイ、キウイ、キウイ…唾が出る…。

一口食べてみる。

鵜野

うゝ、うゝ、甘酸っぱくて美味しい！ って、言いたいな…。バグってるよ、あたし。味がしない。

鳥の鳴き声が聞こえる。

鵜野はその声を聞いていたが、ふと思いつき立ち、手で鉄砲を作り鳥に向かって撃つ。

鵜野

バーン。

鳥の声。

鶺野

バーン！

鳥の激しい羽音。

鶺野

当たった！？ え…？ どっかに得点とか出てないよね？

（と、あたりの看板などを見回す。）

鶺野は上機嫌で主題歌「風の上で眠る」を口ずさむ。

第1場

薄汚れた作業着姿の鴨志田憲司と雉本隼人が急いで来る。

鴨志田はホームに入ると線路の先を見て電車が来ないか見ている。

雉本はホームの時刻表をチェックする。

雉本

（鶺野に）ちよつとすいません。…お、間に合ったよ、鴨。ギリギリ…（スマートフォンをスマートグラスを取り出して掛け）うん、2分前。

鴨志田

上りだろ、それ？

雉本

うん。

鴨志田 下りは？
雫本 下りは行ったばかりだよ。あ、ここも電波来てない。
鴨志田 まじで？ 一応、駅だろ、ここ？
雫本 うん…。（手を動かして電波を探す仕草）
鴨志田 雫本先生、さっきの山でもやってたけど、それなんとかなんないの？
雫本 何が？
鴨志田 電波って掴めないだろ？
雫本 （笑いながら）ああ、ついね。（手を止めて頭を大きく動かして探す）
鴨志田 へ、自慢のスマートグラス様も形無しだな。
雫本 （探しながら）今時ネットにつながる場所なんて無いと思うけど…。
鴨志田 危ねえな、線路だぞ、そこ。
雫本 見えてるから大丈夫。
鴨志田 ホントかよ…。で、下りは何分後？
雫本 ああ。（スマグラを外し、時刻表を見ようとして）う、焦点が…
鴨志田 見えてねえじゃん。
雫本 今、4時8分だから、下りは47分後だね。
鴨志田 まじかよ…。
雫本 上りに乗ろう。
鴨志田 やだね。奴らが追っかけてるに決まってるだろ。おれたち会社の金…
雫本 鴨！（鶺野を気にする）

鵜野

…。(聞こえないフリで、鼻歌を再開する)

鴨志田と雉本は鵜野の様子を伺う。

雉本

(小声で) もうすぐ来る。乗ろう。

鴨志田

やだよ。

雉本

なんでだよ。とにかく乗ろうよ。1時間に1本しかないんだぞ。

鴨志田

下り待とうぜ。次は…(看板を見て) 次、峠中だつてよ。はは、その次はいよいよ峠だろな。あれ、峠上か？

雉本

知らないよ。なあ、街に戻ろう。山ん中入って行ってどうすんだよ。

鴨志田

逃亡者っぽいだろ？ 金はあるんだから食料用意してしばらく山に籠ろうぜ。

雉本

逃亡者って…。そんなことして何になるんだよ？ な、逃亡者だったらやっぱり街に行こう。「木は森に隠せ」っていうだろ？

鴨志田

は？

雉本

「木は森に隠せ」だよ。

鴨志田

…ああ。

雉本

森は木ばかりなんだから目立たないだろ。

鴨志田

ああ！

雉本

つたく。だから、人が多い街にいる方が目立たないだろ？ 指名手配犯なんかみんなそうじゃないか。

鴨志田 指名手配はされてねえだろ、まだ。
雉本 例えだよ。とにかく、山籠もりなんてかえって目立つよ。すぐ通報されちゃうって。山だつて誰

鴨志田 かの持ち物なんだから。

雉本 街なら見つからないって保証あんのかよ？

鴨志田 保証？ 保証なんてないよ、そりゃ。え？ 保証とか言うの？ だったらなんでこんなこと…

雉本 うるせえな。

鴨志田 保証って…。

雉本 ちっ。おれは絶対乗らねえぞ。

鴨志田 いや、もう来るから乗ろう。保証はないけど、街のほうで隠れやすいって。

鴨志田 ふんっ。

雉本 まったく、もう…。

雉本は電車が来る方向を望みつつ待つ。

鴨志田 来ねえな。時間まだか？

雉本 あ、…（急いでスマグラを着けて）時間過ぎてる！ あれ、来てないよね、電車。

鴨志田 来てねえな。

雉本 ええ、どうしたんだろ？

鴨志田 田舎のローカル線だからな。そんな時間通りとかじゃないんじゃない？

雉本 そんなことないよ。単線なんだから管理しやすいじゃん。2分以上過ぎてる。なんかあったのか

鴨志田

な？

調べてみるよ…って、電波ないのか…。

雉本はまた電波を探す。

鵜野

あはは。

雉本が鵜野を見る。

鵜野は目を逸らす。

雉本

あの？

鵜野

ごめんなさい。

雉本

いえ、それはいいんですけど…

鵜野

はい？

雉本

いや、こちらこそ急に話しかけたりして申し訳ないんですけど…

鵜野

はい…

雉本

でもやっぱりお聞きしたほうがいいかなって思いました…

鵜野

はい…。

雉本

あ、でもわかんなかったらわかんないって言うてくれていいですよ。

鴨志田

早く聞けよ！

雉本 いや、だって失礼がないように：

鴨志田 まどろっこしいんだよ。（鶉野に）地元の方ですか、おばちゃん？

鶉野 （鴨志田を見つめる）

鴨志田 ここら辺の電車ってよく遅れるの、おばちゃん？

鶉野 （あからさまに無視する）

鴨志田 …。電車、よく遅れるんですか、おばちゃん？

鶉野 （無視して）遅れてるのはあんたでしょ。

鴨志田 …。電車、よく遅れるんですか。お姉さん？

鶉野 ううん、全然。

鴨志田・雉本

鴨志田 へへ。なんか、すみませんでした。

鶉野 電車、お昼くらいから来てないみたいなの。こんなことなかったんだけどねえ。ほら、自動運転

だからそりやもう正確なもんよ。だから気になってきてみたんだけど…。

じゃ、おれ達が降りたやつが最後くらい…

鴨志田 3時間以上経ってる。何かあったんですか？ 事故とか事件とか？

雉本 さあ…。テレビは何にも言っただけだねえ。スポーツか散歩してるおじさんばかりで。

鶉野 あの、こちら辺でネット繋がらないんですか？ さっきから電波探してるんですけど。

雉本 何にもないところだからね。若い人もいないし…はあ…。

鶉野 信じられない。21世紀も35年目のにそんなところが…

鴨志田 過疎地ってそんなもんじゃありませんか？ あたしだって知ってたらこんなとこに嫁いで来なか

鴨志田・雉本
へへ。　　つたわよ。みんな出てっちゃうし、来る人は変人か自殺志願者ばかりで。あ、あと犯罪者。

沈黙。

鵜野　　でも、気候はいいんですよ。（舞台奥側を指して）こっちは険しい山だけど、（舞台前を指して）

向うの山は低いから、海からの風が越えてくるの。夏だけど過ごしやすいでしょ？

ああ、そういえば、暑さ感じないな。

うん。

でしょ？　果物食べる？　味は保証しないけど。（袋を差し出す）

いただきます。（受け取る）お、キウイ！

鵜野　　うちの畑で採れたの。畑たつて、ほとんどウチの分だけけど。でもほんと、気候が良くなったって

電車が廃線にでもなったらおしまいだね、これも。（突然）いけない！　人待たせてたんだった。

じゃ、どうも。（退場）

キウイ、どうもです！　おい、喰おうぜ。

鴨志田　　いいよ、おれは。

鴨志田　　腹減ってねえのかよ。降りてから何にも喰ってねえだろ。

雉本　　減ってない。

（かぶりつき）うえへ、酸っぱい……って、なんねえな。なんだこれ、味がねえぞ。なんだよ、あのお婆、姉さん。

雉本 どうでもいいよ！ なに呑気に喰ってんだ。おれたちこれからどうすんだよ？

鴨志田 どうって、電車待つしかねえだろ。

雉本 どっちの？

鴨志田 は？

雉本 上りと下り、どっちを待つんだよ？

鴨志田 ああ…。せっかく時間ができたんだ。ゆっくり考えようぜ。

雉本 は？ 会社が血眼になって探してるんだぞ、おれ達を。って、いうか、この金を。（と自分の懐を叩く）

鴨志田 わかってるよ。じゃ、どっちか来た方に乗ろう。それでいいだろ？

雉本 よくないよ。なんでそんなに加減なんだよ。計画性もなくでもないじゃないか。ここに来たのだから「北に向かおう」っていうだけで電車飛び乗って。それから適当なところで乗り換えて、適当なところで降りて。行き当たりばったり。もう、いい加減にしてよ。

鴨志田 古女房みたいなこと言うんじゃないやねえよ。だいたい、ついてきたのはお前だろーが。

雉本 あ、そういうこと言うの？ ここまで一緒にやってきたのに、今さら自己責任みたいなこと言うの？

鴨志田 ほんとに古女房だな…。いや、そうじゃねえけど、おれだけのせいってわけじゃないだろ？

雉本 逃げる計画は鴨の担当だろ。裏金掠めるところまでは完璧だったじゃないか。あれ、おれが考えたんだよ。あそこまではおれの計画だよ。裏帳簿だってデータをコピーしてきたし、完璧だよ、

鴨志田 おれの計画は。

鴨志田 悪かったよ。

雉本

会社の奴らに見つからないのが一番だけど、見つかったらこのデータがあれば身を守れる。完璧じゃないか。それなのに鴨の計画は「北に向かおう」ってだけ……。もう泣きたいよ。

鴨志田

悪かったって。

雉本

なにやっつてんだよ、もう。こんな荒れた畑ばっかりのところ降りたってどうにもならないのは最初から分かってただろ？

鴨志田

いや、少しは店があるんじゃないかってさ。

雉本

で結局、何にもなくて駅に戻ったら、なんと電車が来ない。

鴨志田

それはおれのせいじゃないだろ？

雉本

なんかそういうの持つてるんだよ、鴨は。行き当たりばったりだからハズレの選択肢ばかり引いちやっつて、みるみるうちにドツボにハマってって。

鴨志田

ひでえ言い方だな。

雉本

じゃあ、上りに乗る？

鴨志田

え？

雉本

街に戻って、目立たないように暮らせばいいじゃん。

鴨志田

ああ、それなんだけどさ……。おれはがつつり金使いたいなって思ってたんだよな。せつかく掠め取ってきたんだ。なんか人生が変わるようになってさ。

雉本

鴨志田さん、500万じゃ人生変わんないですよ。しかも2人で500万。1人250だよ。

鴨志田

変わらないかな……。産廃処理場で来る日も来る日もゴミ片付けてるだけじゃつまんねえよ。周りからは汚いもの扱いされてさ。

雉本

転職したいってこと？

鴨志田 転職っていうか、もつと劇的に変わりたいじゃんか。なんつーか、ただの作業員じゃなくなつてき、

もつとこう…

雉本 もつと何？

鴨志田 例えばさ、世の中、土地持つてるやつが一番強いだろ？ だからもし地主になれたら…

軽快な音楽。照明も変わり、インサートシーンとなる。

ハインサート1↓

不動産業者（中鳥役の俳優）とその秘書（鶴田役の俳優）が書類を片手に入ってきて鴨志田に話しかける。

その二人は胸に大きな名札（「ブローカー」「秘書」など）を付けている。
雉本が「妄想」と大きく書かれた札を掲げる。

業者 いやー、お目が高いですね、社長！ この1等地に目をつけられるとは。

鴨志田 おお、やつぱりそうかい！？

業者 はい。その上、ご運もよろしいようで。ね、きみ。

秘書 はい。地元の方が相続税対策で手放した土地でして、今ちようど出たタイミングなのです。さすが社長さん、何かを持ってらっしゃいます。

鴨志田 そうか。いや、おれもそうじゃないかと思ってたんだ。

業者 社長、この土地ならどんなご商売でも成功間違いなしですよ。ね、きみ。

秘書

はい。マンションにしても、商業ビルにしても一瞬でテナントが埋まってしまいます。さすが社長！

鴨志田

よし、じゃこの土地買うぞ。

業者

ありがとうございます！ 1等地のお買い上げ250万円分。

秘書

はい、コチラになります。(手のひらサイズの人工芝を渡す)

鴨志田

ええ！？

業者・秘書

今日からあなたも地主です。おめでとうございます！

インサート1終わり。

元の場面に戻る。

雉本

バカだな。一等地が買えるわけないだろ。もし買えたとしても、金、全部使っちゃったらその後何もできないじゃんか。

鴨志田

わかってるよ…。

雉本

それにこの金は銀行にも入れらんないんだぞ。マイナンバーで監視されてるんだから。

鴨志田

けっ、胸糞悪い。

雉本

だから、現金の使えるところで少しずつ、生活の足しにしながらるのが一番いいんだよ。それか、何かのために隠しておくとか。

鴨志田

つまんねえなく。もういつそ海外にでも高飛びしちまおうぜ。物価の安い国で殿様生活すりゃいいよ。

雉本 一つの時代の感覚だよ。ずーつとめちやめちやな円安なんだぞ。海外からみりやこの国のほうが格安だよ。

鴨志田 そつか。250万じゃ人生変わらないか…。

雉本 ま、少なくともいいほうにはね。

鴨志田 は？

雉本 悪いほうにはすぐ変えられるだろ。盗みでもすりやムシヨで生活できる。どう？ 人生変わるよ。

鴨志田 ムシヨは嫌だろ！

雉本 じゃ、決まりだね。上り電車に乗って街に戻る。で、落ち着いてこれからのことを考えよう。

鴨志田 …だけど、なんかモヤつとすんだよ。

雉本 は？

鴨志田 面白くねえだろ？ 見つかからないように大人しくとか、金もガつと使えねえとか。どうせ人生変わらねえんなら、面白おかしく使っちゃおうぜ。

雉本 なにそれ！ なんていつもそうなんだよ！ 自分のお気持ちだけで行動するなよ。500万なんて、頑張れば一晩で使える金だよ。いや、決して頑張らないけど。でも、おれらにしてみりや少しずつ生活の足しにしたり、イザというときに助かったりする大事な金じゃないか。普通に、平凡に暮らしていけばいいんだよ。

鴨志田 つまんねえな。

雉本 …つまんない？

鴨志田 夢はないのかね、夢は。誰だつてオンリーワンじゃねえのかよ。

雉本 いい歳してまだ中2病か？ 現実的に考えろよ。

鴨志田 だからってあきらめきれねえだろ。自分の人生だぞ。前はもっとノリノリでやってたじゃんか。

△インサート2▽

激しい音楽。

鴨志田が主題歌「風の上で眠る」をハードロック調でがなり、雫本がギターを弾いている。

鴨志田 (通行人に呼びかける) インディーズで音楽やってます！ よかったらCD買ってくださーい！

通行人が通り過ぎていく。

鴨志田 聞いてくださーい。…。

雫本 …あきらめよう。

インサート2終わり。

雫本 あきらめて解散したじゃないか。ヘビローテーション。

鴨志田 くそ、いいバンドだったのにな、ヘビローテーション。

雫本 あれだって思い付きでやっただけだろ。計画性ゼロだったよ。

鴨志田 お前も一緒にやったんだろ。はあ、じゃ、もう金はそれぞれで使えばいいんじゃないか？

雉本
は？

鴨志田
いい加減に金分けようぜ。そうすりやどう使おうが勝手だろ？

雉本
…今？

鴨志田
今。

雉本
別れるってこと？

鴨志田
だから古女房やめろって。解散だよ解散。ずっと一緒にいることねえだろ？ …悪かったな。こ

雉本
んなことに巻き込まんじまって。

鴨志田
いや、乗ったのはおれだから。

雉本
じゃ、ここまでにしようぜ。恨みっこなしで。

鴨志田
…わかった。そうしたいならそうしよう。

鴨志田
…じゃ、金。（と手を出す）

雉本は懐から金の入った封筒を渡す。

受け取った鴨志田は金を数えもせず目分量で分け、少ない方を雉本に渡す。

雉本
数えろよ！ っていうか、少ない方渡す？

鴨志田
おれのほうが年上だろ。

雉本
関係ないだろ。おれが数えるよ。

雉本は札束を奪い、ベンチで金を数え始める。

スーツを着た中鳥吉鷹が来る。

鴨志田

おい。

雉本は慌てて金を隠そうとするが数枚落としてしまい、中鳥に見られる。

雉本

何でもありません…。

中鳥

はあ。 (ベンチ前で深いため息)

雉本

あ、どうぞ。

中鳥

(ベンチに座って) はあ。

鴨志田と雉本は中鳥から距離を取る。

雉本

なんだろ？

鴨志田

電車待ってるんだろ。

中鳥

(つぶやく) だめだだめだだめだ…。

雉本

…なんだろ？

鴨志田

重要な会議に遅れるとか？

中鳥

くそっ。

中鳥は立ち上がり、線路の先を覗き見てホームの端に行く。
遠巻きにする鴨志田と雉本。

中鳥 よし。(線路に飛び込む真似を何度かするが、ふと思いなおし、ホームの逆側に行き、線路の先を覗く。そしてまた飛び込む真似をするが、突然二人に声をかける)

中鳥 あの…

鴨志田・雉本 はい!

中鳥 電車、どっちから来ますか?

雉本 あ、どっちも可能性あるかと。単線ですから。

中鳥 そうか…。困るなあ…。

雉本 え?

中鳥 いや、シミュレーションが複雑になっちゃうんですよ。こっちから来たらこう、あっちから来たらこうって。今、私、そんな精神状態じゃないんで。あ、言ってることわかります?

雉本 はあ。

鴨志田 なんかわかる。

中鳥 せっかくここまで来たのに…。わかります?

雉本 はあ。

鴨志田 わからない。

中鳥 迷惑かけないように、ここまで…。わかります?

鴨志田
雉本

わからないよ。

あの、電車しばらく来ないと思いますよ。なんか昼くらいから来てないみたいで、たぶん止まっちゃってるんじゃないかと。

はあ？　なんで…。

中鳥
雉本

いや、おれたちもわからないですけど。
なんでいつもこうなんだ、私は。（座り込んでしまう）

中鳥
雉本

あの、何があったか知らないですけど、電車来なくてよかったんじゃないですか？

中鳥
雉本

いや、わからないですけど…。

中鳥
雉本

だったら放つといってください。

中鳥
雉本

放つといってください。
放つといえますよ。

中鳥
雉本

…。迷惑かけないように、頭でいろいろシミュレートして行動してるんです。どうしてうまくい

中鳥
鴨志田

かないんだ…。
聞いてほしいのかな？
すでに迷惑だろ。

中鳥
鴨志田

ああ、すみません、迷惑かけちゃって。もう黙りますので。
いいよ、ここで止められたほうが迷惑だよ。
あの、何があったんですか？

中鳥
鴨志田

あの、何があったんですか？

中鳥
鴨志田

あの、何があったんですか？

中鳥
鴨志田

あの、何があったんですか？

中鳥 ああ、ありがとうございます。やっと出ました、シミュレーション通りの言葉が。

鴨志田 迷惑だな、それ！

中鳥 すみません。私、幼少の頃から人に迷惑を掛けちゃいけないって厳しく育てられたものですから、

頭で何度もシミュレートしなくちゃ不安で行動できないんです。何パターンも何パターンもシミュレートしてそれから…結局疲れて行動できないこともあります。それに、シミュレーション外

のことが起こると固まっちゃいますし…。

すでにバグってるな。

鴨志田 あの、もしかして、電車に飛び込むためにここまで来たんですか？

雉本 ありがとうございます。…実は、そうなんです。

中鳥 どうして、そんな？

中鳥 ありがとうございます。…それは、都会で飛び込んだら大迷惑じゃないですか。

雉本 (鴨志田に) シミュレーション外。

鴨志田 つっこみどころだらけだな。動機を聞いているの。そうしようと思った動機を。

中鳥 ああ、すみません。えっと、どこから説明したら…そうか、(内ポケットから名刺を出して) 私、

こういう者です。(渡す)

鴨志田 自己紹介からかよ。(受け取る)

雉本 (名刺を見ながら) 中島吉鷹さん。いい名前ですね。

中鳥 あ、鳥です。鳥じゃなくて鳥。中鳥です。

雉本 ああ…。

中鳥 気持ちいい！ これ、シミュレーション通りです。

鴨志田

放っておこうぜ、もう。

中鳥

ああ、すみません。そうじゃなくて、私が会社員だったってことをわかっていただきたくて。

雉本

だった？

中鳥

はい…。(鴨志田の手から名刺を取って破り捨てて) 先日、リストラされました。

鴨志田

ああ…。

雉本

それで電車に…。

中鳥

微妙なリアクション、それもシミュレーション通りです。リストラで自殺なんて月並みですよ。年間3万人も自殺してるんですから。でも、人にはそれぞれ事情が…、私にもそれなりに…。私は同期だった社員を売ってしまったんです。

ヘインサート3▽

中鳥の同期である女性社員(鶴田役)が登場し、中鳥の回想となる。(胸に「同期」という大きな名札をつけている)

鴨志田と雉本はベンチに座り、リビングでテレビを見ている態。バックに悲劇を予感させる音楽が流れる。

社員

中鳥、聞いた？ やっぱりうちもやるみたいだよ、リストラ。

中鳥

うん、みたいだね。希望退職の募集だけじゃ足りないのかな…。

社員

たまんないよね。私、選ばれちゃったらどうしよう。まだ子供が小さいのに。

中鳥

そっか。シングルマザーだもんね。でも、キミは同期の出世頭だから…。

社員

わからないよ。私、転勤とか出向とかできないしね。業務命令を聞かなかったとか、理由はいろいろつけられるでしょ。職場に居辛くして自主退職に追い込むとかね。

中鳥

そこまでするかな…。騒がれたら大事（おおごと）だよ。

社員

いやいやいや。何もしないためなら何でもするよ、会社っていう組織は。

中鳥

なにそれ。

社員

中鳥も気をつけな。今、人事部が社内の噂とか調べ捲ってるから。

中鳥

え？

社員

人を追い込むネタ探してるでしょ。私も聞かれたよ。ま、笑顔で乗り切ったけどね。「私、知

中鳥

りません！」（はち切れる笑顔）って。

社員

さすがだね。

中鳥

ただ、あれはきつかったな。同期だからってあんたの様子も聞かれたの。

社員

ええ？ 何て話したの？

社員

「私、知りません！」（はち切れる笑顔）

中鳥

あ、ありがとう！

社員

同期のザクロって言うじゃない？ お互い助け合って行かなきゃね、同期のザクロ。ま、中鳥は

いつも迷惑かけないように生きてるし、成績もそこそこ上げてるから大丈夫かな。私ほどじゃないけど…（などと言いながらフェードアウトする）

中鳥

（悲劇的音楽とともにナレーション風で観客に）彼女の言葉を最後まで聞くことができませんでした。自分がどうなるのか心配で心配で。そして「同期のザクロ」が気になって気になって…。

人事部員（鵜野役。名札「人事」）がペンと書類を持って来る。

人事

気軽に話してくださいね。人事部としては、快適な職場環境を作りたいだけですから。

中鳥

はい。でも、同期のことで特に気になることなんてありませんから。

人事

そう。ところで、これは内緒なんですけど。中鳥さん、あなた少くし人事評価微妙なんですよ。

中鳥

ええ？

人事

このままだと人員整理のときに対象になっちゃうかもしれないので、内緒でお耳に入れておきますね。

中鳥

えっと、あの、私どうすれば…

人事

大丈夫。評価が低いというわけじゃありませんから。うくん、じゃ内緒で裏技教えちゃおうかな。

中鳥

お願いします！

人事

例えば、同期の誰かが先に対象になったりしたら、中鳥さんは大丈夫ですよ。

中鳥

…そ、そうなんですか？

人事

まあ、他力本願的になっちゃいますけど。でも、もしそうなった場合、中鳥さんは昇進だって考えられますよ。

中鳥

昇進ですか？

人事

言ったじゃないですか、人事評価が微妙だって。微妙っていうのはそういうことでもあるんです。

中鳥

そうですか…。

人事

でも、同期の方たちはみんな優秀ですもんね。…。なんかズルいと思いませんか？

中鳥

人事

中鳥

人事

中鳥

人事

中鳥

人事

中鳥

人事

中鳥

え…。

だって中鳥さん、周りに迷惑かけないようにいつも気を使ってくださってるじゃないですか。だから我慢することも多いんじゃないかなって思うんです。大変でしょ？

はあ…。

でも同期の方たちはみんな仕事の評価は高いし、結婚してたり恋人いたりプライベートも充実してて。なんで自分ばかり我慢してんだろ、ズルいズルいって思っちゃいますよね？ 小さい子供との幸せな時間だって中鳥さんがカバーしてるから味わえるのに、そこら辺、ちゃんとわかっているのかしら？

…。

(書類にメモしながら) えっと、中鳥さんからは、特になし、と。それじゃお疲れさまでした。

(被せて) あのだ！

(被せて) はい！

同期の一人が、転勤や出向には応じられないって漏らしました。

あらあら、大変！

(悲劇的音楽がかかり、ナレーション風に) 私は同期のザクロを売ってしまいました。彼女なら、優秀な彼女ならこの会社じゃなかったって、どこでもうまくやっていけるはず。私よりずっと優秀な彼女なら。そうだ、同期のザクロだって言い間違いのほざがない、きつと私の気持ちをほぐしてくれようとしたんだ、きつとそうだ、同期のザクロ面白いな！…そう自分に言い聞かせて。そして、私には昇進の話が持ち上がりました。会社が昇進準備のために研修を用意してくれたん

です。

人材コンサルタント（鶴田役。名札「コンサル」）がテンション高く来る。

コンサル

中鳥さん、ようこそお越しく下さいました。この研修は、中鳥さんのご昇進を必ず成功させるために、ご自分を見つめ、適性を知り、ご自分の能力を最大限に活かしていただくことを目指していきます。

中鳥

はい、よろしくお願いします。

コンサル

（書類を見て）ああ、中鳥さん、事前のテストも素晴らしい成績ですね。さすがです。

中鳥

ありがとうございます。

コンサル

でも、もったいないですね。この成績なら年収1.5倍は行けますよ。

中鳥

え…

コンサル

実際、弊社の紹介する企業さんでしたら年収2倍も行けるんですが、中鳥さんは堅実な方で、1.5倍のところにしておきましょう。

中鳥

あの、これ研修じゃ…？

コンサル

ああ、ごめんなさい、先走っちゃって。でも、もったいないですよ。御社に依頼された研修で申し訳ないですけど、御社は中鳥さんをきちんと活かしてないですね。中鳥さんもそう感じてるんじゃないですか？

中鳥

え、ああ…

コンサル

じゃ転活しちやいましょうよ。年収1.5倍ですよ、1.5倍。（小声で）御社を退職してるの

が条件です。（元に戻り）中鳥さんの能力をもっともっと活かしちゃいましょう！
御社を退職しているのが条件です。（元に戻り）中鳥さん、お任せください！
（小声で）

インサート3、終わり。

鴨志田

ブラックだな。研修じゃないじゃん。

中鳥

これが一か月続いて、諦めました。

雉本

何もしないためなら何でもするってことか…。

中鳥

はい…。

鴨志田

はあ、それで飛び込みたくなつたと。なんかわかるな…。

中鳥

いえ、私のことだけだったらいんです。

鴨志田

え？

中鳥

自分のことは自業自得ですから。それよりも…。

雉本

同期の女性ですね。その、あなたが、売ってしまった…。

中鳥

はい。私のせいですが彼女には転勤の辞令が出ました。彼女が断つても断つても会社は何度も辞

令を…。当然、職場には居辛くなって、数か月後に彼女はそっと辞めてしまいました。

鴨志田

ひでえな…。

雉本

その彼女、シングルマザーだって言っていましたね？

中鳥

はい。

雉本

じゃあ、再就職は相当厳しいんじゃないですか？ いくら優秀な人でも条件が…。

中鳥

雉本

中鳥

雉本

中鳥

雉本

中鳥

雉本

鴨志田

中鳥

鴨志田

中鳥

雉本

中鳥

そうなんです。どんなに応募しても面接までたどり着くことすらできずに、彼女は！ ああ、小さい子供を抱えて大変だったんだろうな。私のせいで、彼女は！

そうやって自分を責めるもんじゃありませんよ。そのときのあなたにはそれしか選択肢がなかったんだし。ね、自分を守るためにはそうするよりしかたないってことはありますよ。

でも、どこにも受け入れられず、彼女はとうとう！

それだってあなたのせいじゃない。そうなってしまったことは心が痛みますけど、それでもそれは彼女の選択です。あなたがなんでも背負えるわけじゃない！

とうとうバイトで食いつなぐことに…。

…。良かったじゃない。

良くないですよ！ 全然お金足りないに決まっていますよ。

いや、そういう意味じゃなくて…。

で、結局、あなたはなんで飛び込もうとしたの？ 同期売ったことを気に病んでってこと？

一言で言うとうそいうことでしょうか…。でも、そういう現実を遠くから眺めて笑ってる自分もいるんです。サラリーマンに何ができる？ 何もかも会社次第だってわかってた。はい、自己責任、はははーって。

胸糞悪いな…。

そんな自分が嫌で引きこもりました…。貯金もすでに…：そういえば、さつきお金教えてましたよね？

え？

あれ、どういってお金ですか？

鴨志田

おいおい、なんだ、てめえ。どういうつもりだ？

中鳥

いえ、どういとお金かと…。

鴨志田

脅そうつてのか？

中鳥

脅す？ はは、それシミュレーション外です。今のが脅しに聞こえるんですか？ ということは

鴨志田

…。それ、どういとお金ですか？

雉本

どうもこうもねえよ。あれはおれたちの金だ。文句あるか？

中鳥

あなたに関係ないでしょ。あんな大金を持ち歩いてるのおかしいと思ったんですよ。しかもこんな田舎の無人駅で数えてる

雉本

は？

鴨志田

かっこいい？

中鳥

それ盗んだんですか？ それとも騙し取ったとか？ いずれにしても会社とかお金持ちとかに

鴨志田

一矢報いたんですね。すごいなあ。

中鳥

あんた、何言ってるんだ？
だって、懂れちやいますよ。私、人に迷惑かけないようにってだけが人生の目標でしたから、そ

鴨志田

んなこと考えもつきません。
褒めてるのか？

雉本

貶してるんですよ。

中鳥

(悲劇的音楽とともに観客に) 私は純粹過ぎました。人の裏側なんて考えもせず…。

疲れた様子の同期の女性社員（鶴田役。名札「同期」）が来る。

社員 なんなの、中鳥。うちまで訪ねて来ないですよ。

中鳥 ああ、ごめん。でも、元氣そうで安心した。

社員 は？ 元氣そうに見える？ バイトで食いつないでる私が？

中鳥 ああ、ごめん…。

社員 いいよ。何の用？

中鳥 ああ、どうしても言いたいことがあって…。

社員 うん、何？

中鳥 （土下座して）申し訳ありませんでした。きみがこうなったのは私のせいです。私が、きみを売

ったから…。申し訳ありませんでした。

社員 ふーん、私を売った？

中鳥 そうなんだ。人事部に聞かれたとき、思わず、つい、なんでかわからないけど、転職や出向を受

け入れられない同期がいると…。

社員 …なるほどね。で、わざわざ謝りに来たってわけ？ 土下座されたって私の状況は変わらないよ。

中鳥 わかってる。だから、これ…。（ポケットから封筒を出す）少ないけど、全然足りないと思うけ

ど、このお金を使ってください。100万。私の全財産です。

社員 なにやってんの、あんた？ お金で許してもらいに来たの？

中鳥 いや…、そういうわけじゃ…（封筒を引っ返める）

社員 許す許す（と封筒を奪う）。

え…。

社員 （中身を確認しながら）ごめんね。お金なんかいらなくて言いたいところなんだけど、ほら、子供抱えてるとそうも言っちゃられないのよ。助かるわ。でもこれ、全財産って…。あんた独身なのに100万が全財産？ ま、許す許す。これ以上タカつたりしないから安心して。じゃね。（行こうとする）

あ、ありがとうございます。

社員 （立ち止まり）…ああ、お礼まで言われちゃうと言いくいんだけどさ。あたしも売ったんだよね、あんたのこと。

え？

人事にいろいろ言っちゃった、あんたのこと。

社員 え、だって「知りません（笑顔）」って。きみ、「知りません（笑顔）」って…

社員 そりゃ本人にはそう言うよ。でも、おかげでスッキリした。あんたももう気にしないでね。じゃ。

（退場）

ちよっと！

インサート4 終わり。

雑本

鴨志田

足の引っ張り合いだ。

サバイバルすぎるぜ。

中鳥

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

中鳥

雉本

鴨志田

雉本

中鳥

だから尊敬します。あなた方みたいに誰かを出し抜いて生きていくなんて私にはできません。でも、悲しいことに自分を守るためには人から奪わなければならない時が…

いや、そういうことか？

なあ、雉。もしかしておれたちもこんなことしちゃったのかな？

は？

おれ達も結局、誰かの足を引っ張っただけじゃねえのか？

何言ってるんだよ。会社の邪魔しただけだろ。

いや、だから、そのせいで他の社員とか、バイトの外国人とかが割喰ってるんじゃないか？

それは、わからないけど…。

ほれ見ろ、ほれ見ろ！ ああ、誰の足引っ張っちゃったんだ！？

落ち着けよ。これは裏金だ。産廃処理場が盗品受け入れて作った金だ。どうせ癒着してる政治家

に流れるだけだろ。おれたちは悪い慣習を打ち破っただけ。いや、むしろ良いことしたんだ。

…そうなのか？

そうだよ。

なんかモヤモヤすんな…。

裏金奪ってきたんですか！？ かつこいい！！

え…

お前ちよつと黙ってる…って、ああ！

…。ああ、じゃないよ…。

いいじゃないですか！ 会社の黒い金を奪って逃走。憧れるなあ。

対決風の音楽。

中鳥がサングラスを掛けて産廃処理場の社長になる。(名札「社長」)

社長

わっはっは。儲かった儲かった。笑いが止まらんぞ。

鴨志田

社長、お願いです。その金をみんなの給料に回してください。

社長

バカ言うんじゃないやねえ。誰のおかげで働けると思ってるんだ。文句いってねえで作業に戻れ。

鴨志田

くそ、安い給料でこき使いやがって…。みんなワケ有りだから大人しくしてるけど、もうギリギリなんです。

社長

ドアホ！ そのワケ有りの連中を働かせてやってんだぞ。ありがたく思え！ 政治家や役人対策にどれだけかかると思ってるんだ。

鴨志田

だけど…。

社長

そうか、お前も少しは甘い汁吸いたいな。どうだ、お前に1%回してやる。それでみんなを抑えてくれ。な、一緒にウインウインしようぜ。

鴨志田

1%…ってことは…

雉本

(登場して) 受け取るな、鴨志田憲司！

鴨志田

雉本隼人！

雉本

そんな黒い金を受け取っちゃいけない。

社長

貴様…。

雉本 弱みに付け込む悪党め！ 許さん！

社長 じゃ、邪魔する気か！？

雉本 当たり前だ。裏金作って捕まらない奴ら、賄賂で仕事を左右する奴らを許せるものか！ 覚悟しろ！

雉本と社長の格闘。

鴨志田 頑張れ、雉本隼人！

雉本が社長を倒し、金の入った封筒を奪って掲げる。

雉本 よし、奪ったぞ。これはおれたちがもっと有効に使ってやる。いくぞ、鴨志田憲司！

鴨志田 雉本隼人！ 迷ってごめん！

インサート5 終わり。

中鳥 って感じですよ？

雉本 違うわ！

鴨志田 なんてお前の妄想なんだよ。

中鳥 すみません。シミュレートしたらこんな感じかなって。

鴨志田　もつとスマートだったよ、おれたちは。

雉本　まあ、職場の状況は間違っちゃいけないけど、もつと計画的だったし、頭を使ったんだ。

鴨志田　おう、知能犯だよな。

ハインサート6▽

スリリングな音楽。

雉本がパソコンを操作し、鴨志田がそれを覗いている。

鴨志田　どうだ？

雉本　もう少し…これだ。(エンターキーを叩く)よし、裏帳簿を見つけた。(スマグラを掛けて)コ
ピーして持ち出すぞ。そっちは金庫を開けてくれ。今日入ってるはずだ。

鴨志田　金庫？　どこにある？

雉本　そこにあるだろ。(と客席を指す)

鴨志田　ああ、これ金庫か。(観客の一人を金庫とする)開けていいですか？

雉本　何やってるんだ。4ケタの暗証番号を入力すれば開くはずだ。

鴨志田　暗証番号は？

雉本　いつの時代でも暗証番号は誕生日だよ。

鴨志田　(観客から誕生日を聞いて入力する)開かないぞ。

雉本　くそ、何か本人に関連するか、縁起のいい番号だ。

鴨志田　縁起のいい…？　ヨロシク(4649)とか？

雉本　それは挨拶だろ！
鴨志田　えっと、じゃあ…福耳！（2933）福耳だ！　縁起いいぞ！（入力して）お願いします。お
雉本　願います。
早くしろ！

金庫役の観客が開けてくれるまでお願いします。

鴨志田　開いた！　金があつたぞ！　たぶん500万！

雉本　よし、逃げよう。鴨、どうする？

鴨志田　北だ。北に向かうぞ！

雉本　おう！

鴨志田　やったやったやった！

インサート6　終わり。

中鳥　かっこいいです！

鴨志田　だろ！（雉本に）な？

雉本　…。（恥ずかしそう）

中鳥　そうか。あなた方は義賊なんですね。

鴨志田　義賊？

中鳥 鼠小僧とか石川五右衛門とか。弱きを助け強きを挫くつて。

鴨志田 おお、いいなあ、義賊。

雉本 いや、この金は自分たちのために使う。

中鳥 え…。

鴨志田 いや、まだ決めちゃいねえよ。少なくともおれは決めてねえ。

雉本 まだそんなことを…。

鴨志田 じゃ、おれたちはなんで逃げ回ってるんだ？ 大っぴらに金も使えねえ、静かに暮らさなきゃならねえ。なんでそんなことになってるんだよ？

雉本 そういうもんだよ…。

鴨志田 いや、自分たちのために使おうとしてるからじゃないか？ 金をもっと、なんか、大きくなっていか、意味あることに使うなら堂々としてられるんじゃないか？ そうだよ、雉。おれたちは

義賊になろう。

雉本 はあ？

鴨志田 差し当たり、子供食堂に寄付するつてのはどうだ？ 全国に1万か所以上あるつて聞いたぞ。そんだけ3食食えない子供がいるんだろ？ 子供食堂に寄付したら義賊になれるんじゃないか？

雉本 そんなことしたつてしょうがないだろ。

鴨志田 何がしょうがねえんだよ。困ってるんだから喜ばれるに決まってるだろ。

雉本 根本解決にならないつて言ってるんだよ。一回切りの寄付でなんとかなることか？

鴨志田 そうだけど、できること少しづつやつて何が悪いつてんだ。

雉本 悪かないけど、困ってる人みんなにあげてたらキリないだろ。

第2場

鴨志田 できる限りでいいじゃんか、困ってるんだから。
雉本 そういうのを自己満足って言うんだよ。
鴨志田 て、てめえ…
中鳥 あの、良い考えがあります。私に分けてくださったらどうでしょう？
鴨志田 は？
中鳥 私も困ってます。死にたくなるほど…。
鴨志田 てめえ…。
雉本 ははは、なんだ、この人？
鴨志田 どいつもこいつも自分のことばかり考えやがって。
中鳥 そんなこと言わないでください。私、ほら、あなた方の秘密を知っちゃったわけですし…。
鴨志田 (雉本に) 脅してやがる。
雉本 絶対あげない。
鴨志田 ほんとは困ってないだろ。
中鳥 …困ってますよ。(二人から離れる)
鴨志田 変な気起こさねえで大人しく座ってな。いつ電車くるかわかんねえけどよ。(雉本に) おい、さ
つさと金分けようぜ。
雉本 …うん。

雉本が金を教えようとしたとき、鶴田夕が急いで来る。

鴨志田

おい、また！

雉本は慌てて金を隠して鴨志田とともに鶴田と距離を取る。

鶴田は時刻表を見たり、線路の先を見通してみたりしている。

鶴田

困ったな…。

鴨志田がハツとして鶴田を見る。

鴨志田

(雉本に) おい…。

雉本

え？

鴨志田

困ってるぞ。

雉本

だから？

鴨志田

教えたほうがいいんじゃないか？

雉本

なんでおれが？

鳥の声が聞こえる。

鶴田は空を見上げ、深呼吸をして、髪を風になびかせるように払う。

その姿は何かを決意したかのように美しい。
息を呑む鴨志田と雉本。

鴨志田
おい。

雉本
うん。旅は道連れって言うしな。

鴨志田
大勢のほうが絶対楽しい。

雉本
うん。

鴨志田
行け。

雉本
おう。

中鳥
（鶴田に）あの、止まってるみたいですよ、電車。

鴨志田・雉本
……！！

鶴田
……（中鳥を上から下まで見て）。どうも。

中鳥
いえ……

鶴田
何か？

中鳥
あ、すみません。会社の同期に物凄く似てるもので。どこかでお会いしたこと……

鶴田
ないです。

中鳥
ですよ。 （引き下がる）

鶴田が鴨志田と雉本を見る。

二人は慌てて別の方向を見る。

鶺野が慌てて入ってくる。

鶺野 夕ちゃん、忘れ物！ これこれこれ。（と文庫本「地獄のオルフェウス」を渡す）

鶺野 あ。ありがと、お姉ちゃん。

鶺野 慌てないで、気をつけて帰ってね。

鶺野 うん。大丈夫。

鶺野 ……力になれなくてごめん。せつかく来てくれたのに。

鶺野 ううん。

鶺野 じゃ、戻るね。やることいっぱいあるのよ、こんなド田舎の主婦だっていうのに。少しでも手を

抜いたら、もう鬼の首でも取ったみたいに重箱の隅つついて責めるのよ。地獄だわ。

鶺野 さっき聞いた。DVの文学的表現だよね。

鶺野 あんた、難しいこと言うよね、相変わらず。まあ、昔はみんなそうだったんだから…。

鶺野 昔じゃないよ、今。

鶺野 わかっているけど…。

鶺野 ごめんごめん。いいよ、行って。

鶺野 うん…。ああ、私にお金があったらなー。こういう時に何にもできないんじゃない姉として面目ないよ。

鶺野 いいんだって。顔見ただけで元気もらったから。

鶺野 そう？ じゃ、行くね。（鴨志田と雉本に気づいて） あら、あんたたちまだいたの？

雉本 いや、

雉本

鴨志田 電車来ないから。
鶴野 そっか。(小声で鶴田に) 気をつけてね。こいつら犯罪者っぽいから。
鴨志田 聞こえてる!
鶴野 さっき、金がとか指名手配がとか言ってたじゃない。
鴨志田 いや、それは…。
雉本 我々は怪しい者じゃありません。
鴨志田 怪しいだろ。
雉本 鴨!
鶴野 どっちなの?
雉本 …少なくとも、人に危害加えるようなことはしなないです。
鶴野 自分で言うのが怪しい。
雉本 ええ?
中鳥 大丈夫です! 私、この人たちから話聞きましたから。この人たち、義賊なんです。
鶴野 は?
鴨志田 黙ってろよ。
鶴野 義賊ってやっぱり泥棒じゃないの! (中鳥に) っていうか、あんた誰?
中鳥 あ、すみません。申し遅れました。私、こういう者です。(と名刺を出す)
鶴野 (受け取り) 中島吉鷹、さん…。
中鳥 鳥です。鳥じゃなくて鳥。中鳥です。ああ、気持ちいい!
鴨志田 引っ込んでろよ!

鶴野 うん…。でもほんとに大丈夫？ 泥棒と自殺志願者だよ？ ま、あんたも劇団員だけど。

鶴田 どういう意味？

鶴野 いや、別に。(皆に)あの、皆さん、よろしくお願ひします。この子、あたしの妹なんです。あ、もしかして皆さん観たことあるんじゃないかしら。この子、東京で劇やってるんですよ。小さい劇場で。

鶴田 お姉ちゃん！

鶴野 小劇場俳優って言うんですって。鶴田夕です。

鶴田 やめてよ。

鶴野 いいじゃない。もしかして観たことあります？ 鶴田夕。

雉本 あ、いや、ちよつと…

鴨志田 劇とか、観ないもんなあ。

雉本 難しそうだし。

鴨志田 狭いところで何か訴えてきちゃうんですよ？ そういうのちよつと…

鴨志田・雉本 ねえ。

中鳥 私、興味あります。地下アイドルにハマってたことありますんで。

鶴野 あ、そういうのじゃないのよね…。あたしも配信でしか観たことないんだけど…。(鶴田に)ね、やっぱりテレビに出ないとだめだよ。狙いなよ、テレビ。

鶴田 やめて。そういう価値観ばかりじゃないんから。

鶴野 でも、知ってもらってなんぼでしょ？

鶴田 いい加減にして。今、そういうことはいいでしょ？ ほら、早く家戻りなつて。何かわかったら

鶴野 教えてね。
雉本 うん、わかった。(行こうとする)
鶴野 ああ！ 家ではネット繋がってるんですか？
鶴野 ああ…回線はつながってると思うんだけど、どのサイトも開けなくて…。
雉本 どうして？
鶴野 さあ？ 今日に限って何も見れないの。困るのよね。ウチ、ネット回線でしか電話できないから、
鶴田 …プロバイダね。
鶴野 それ。
一同 …？
鶴田 プロ、バイタ(売女)
一同 ああ！
鶴田 すみません。
鶴野 なんて謝るの！？
鶴田 (無視して雉本たちに) だから、ともかく駅で待ってみようかなって。
雉本 なるほど。
鶴野 じゃ、あたし戻るね。何かわかったらまた来るから。
鶴田 うん。電車来たら乗っちゃうね。後で連絡する。
鶴野 うん。頑張ってるね。何があってもあたしは味方だよ。
鶴田 ありがとう。

鶴野

じゃね。(去りながら) ああ、人がいないって大変。捨てられたんじゃないのかな、ここら辺。
(退場)

見送る一同。

中鳥

鴨志田

：そんなことあるのかな？
は？

中鳥

雉本

中鳥

今、ネットも電話も繋がらないんですよ。ちょっと怖くないですか？
何の情報も入らないってことか…。
なんて言ったら繋がってたりして。(スマホを出して確認する)

鴨志田もスマホを見、雉本はスマグラを見る。

その様子を見ていた鶴野もスマホを見てみる。

一同、溜息。

鴨志田

鶴野

こんなド田舎だからな。(鶴野に) あ、すみません。
：いえ。

鴨志田、雉本、中鳥は思い出したように鶴野から少し離れる。

雉本
鶴田 …すみません。
雉本 いやいやいや。そういう意味じゃなくって。
鶴田 どういう意味ですか？
雉本 いや…。（と引っ込む）

沈黙。

鴨志田 おれは鴨志田。劇やってるんだね。すごいじゃない。
鶴田 別に、すごくないです。
鴨志田 いやあ、夢追いつけるんだから、やっぱりすごいよ。な？
雉本・中鳥 うん。（はい）
鶴田 別に夢追ってないです。現実なので。
鴨志田 ああ…。（引っ込む）
鶴田 …すみません。曖昧に受け流すの苦手なんです。
鴨志田 いえいえいえ。

沈黙。

中鳥 でも、演劇とか、表現活動してる人っていいですよ。自由って感じで。

鶴田
中鳥
：（上から下まで眺める）
すみません…。（引っ込む）

沈黙。
鳥の声が聞こえる。

雉本
中鳥
鴨志田
鳥だ。
鳥ですね。
鳥だな。

沈黙。

鶴田
鴨志田
鶴田
鴨志田
鶴田
鴨志田
鶴田
鴨志田
鶴田
え？
足の無い鳥って知ってます？
足の無い鳥。テネシー・ウィリアムズって作家の戯曲に出てくるんです。
戯曲？
ああ、劇の台本。
ああ。テネシーの？
…。（文庫本を出して）テネシー・ウィリアムズの「地獄のオルフェウス」っていう作品なんですけど。

鴨志田

へー。

鶴田

自由だと思いますか？ 足の無い鳥がいたら。

鴨志田

え？

足が無いから地上には降りられない。飛び続けるしかない……。 (空を見て) あの鳥の足は見えますか？ 遠くからじゃわからないですよ。もしかしたらあの鳥には足が無いのかもしれない。だから飛ばざるを得ないのかもしれない。ものすごく自由に見えるけど……。では、クイズです。足の無い鳥は一度だけ地上に降りることができません。それはいつでしょうか？

鴨志田

え？

鶴田

ブブー。時間切れ。答えは「死ぬとき」。足の無い鳥が地上に降りられるのは死ぬときだけ。：

鴨志田

足の無い鳥は自由だと思いますか？

いや……。

鶴田

これに答えはありません。それぞれに感じるごとかと。

鳥の声。一同、空を見上げ、鳥を追う。

鶴田

自由っていったいなんでしようね？ ……って昔の人が歌ってましたね。だいたい、今は「あの人が自由だな」ってちよつとデイスって使いますしね、自由。あ、この劇の台本はもつとすごいですよ。足の無い鳥みたいに自由に見える青年が地獄みたいな閉鎖的な町に降りてくるんです。で、見た目は美しいし自由に生きてるように見えるし、みんなの目にはすごく眩しく映るんですけど、本人はただ誠実に生きようとしてるだけ。それなのに、周りに憧れられて、妬まれて、町を引つ

鴨志田

鶴田

雉本

鶴田

雉本

鴨志田

中鳥

鴨志田

鶴田

鴨志田

鶴田

鴨志田

雉本

中鳥

鶴田

三人

雉本

掻き回すことになって、結局、リンチされて殺されます。
ええー。

ひどいでしょ？

だから劇イヤなんですよ。怖いし複雑だし。

そうですね。でも、たまには見てやってください、劇。あんまり単純化されたものばかり見ると奴隷にせれても気付けませんよ。

奴隷？

奴隷？

奴隷…。

だけど、所詮は劇の中のことだろ？ 足の無い鳥がリアルに居たら、どっかで寝なきやならないじゃん。そういうのが都合良く出てこないのが劇だよ。

風の上で眠るんですって。

え？

足の無い鳥は、疲れたら風の上で眠るんです。

かっこいいじゃん！ 風の上で眠るのか！

詩的表現ってやつだ！

すごいですね、劇！

ちよっと見る気になりました？

見る見る見る！

あの、鶴田さんの劇は今度いつあるんですか？ 絶対行きますよ。

鶴田 ああ…。
雉本 なんて劇団ですか？ ネット繋がったらすぐチェックします。
鶴田 ああ…ウチはちよつとしばらく無理かも…。
雉本 え？ なんですですか？ あ、資金難とか？
鶴田 それはいつもです。そうじゃなくて…。いろいろ、問題があつて。つていうか、座長が最悪で…。

ハインサート7V

重さを強調した音楽。

劇団の座長（鴨志田）が並んでいる劇団員A B（雉本、中鳥）と鶴田に怒鳴っている。

座長 ダメだダメだ！ なんでこんなにできないんだ！？ これじゃ、本番なんて迎えられないぞ！

一同 すみせん、座長！

座長 公演できなくなるぞ。もつと命掛けてやれ。

鶴田 （観客に）根性論。

座長 （Aに）お前、例のあのセリフ全然言えてないじゃねえか。

A すいません。家ではちゃんとできたんですけど。

座長 それじゃ意味ねえだろ？ 人前でやるんだから。

A すいません。なんか、座長の前だとすごく緊張しちゃつて。

座長 おれのせいにするのか。おれは演出家として仕事してるだけじゃねーか。できねえのは自分の練習不足だろ。セリフ100万回言ってみたのかよ？

鶴田 (観客に) 無理難題。

A あの、99万回は言ったかなと…。

座長 99万回？ 100万回って言っただろ。まったく、おまえはそうやって誤魔化すところあるよな。だからダメなんだよ。

鶴田 (観客に) 人格攻撃。

座長 今、セリフ言ってみろ。言え！

A (大げさに) ああ、ポチエットリーナのポシエットがポチエツとポシヤツてしまうなんて！

鶴田 (観客に) 意味不明なセリフ。

座長 なんだよ、それ。ポチエットリーナの可愛さもポシエットがポシヤツた残念さも全然出てないぞ。

お前、役者辞めるか？、お前辞めたって代わりはいくらでもいるんだぞ。

鶴田 (観客に) 脅迫。(戻り) あの、座長。そんなふうになされたら誰だってちゃんとできません。も

つとリラックスして…

座長 お前は黙ってる。これがウチのやり方なんだよ。

A ごめんね、夕ちゃん、迷惑かけて。おれ、もっと頑張るから。

座長 よーし、じゃ、自主練しとけよ。

A はい。「ああ、ポチエットリーナのポシエットが…」

座長 今じゃない！

A すみません！

座長 まったく…。(Bに) 次、お前。

B はい！

座長 お前はセリフも全然だけど、特にひどいのがリアクションだ。後ろの物音に気付いて「うわっ」
 座長 っって言ってみろ。自然にな。
 B はい。(鈍くさい演技の末) うわっ!
 座長 ははは! なんだよ、それ。みんな見た? (真似して) 「うわっ」だって。正気かよ、ははは!
 鶴田 (観客に) 笑い者にする。
 座長 お前も自主練してこい。自然にできるまで来なくていいぞ。
 B すみませんでした。
 鶴田 (観客に) そして:
 座長 次、夕。
 鶴田 はい。
 座長 お前は居残り。
 鶴田 え?
 座長 今のお前には話しても無駄だ。マンツーマンで稽古つけてやるよ。手取り足取り、お前の感性を
 座長 おれが開いてやる。
 鶴田 (観客に) セクハラ。いや、犯罪。
 座長 よーし、夕以外解散! 夕、あとでな。
 鶴田 (観客に) 劇団主宰、作家、演出家。小さな世界の王様に誰も逆らえませんでした。
 A (鶴田を見て) お疲れ様でした…。
 B

インサート7 終わり。

鴨志田

最低だな、演出家ってやつは！

鶴田

みんな、見て見ぬフリで…。女の先輩なんか「座長のマンツーマンは効果あるよ〜」なんて言っちゃって…。

鴨志田

共犯じゃんか、それ。

鶴田

だから、SNSで告発したんです。助けて欲しかったし、みんな演劇が好きだからやってるんだと思っただけ…。

鴨志田

それで？ ぶっ飛ばせた？ その演出家。

鶴田

一定の効果はありましたけど、逆に私が訴えられました。名誉棄損だって。

鴨志田

は？

鶴田

もう戦えません…。

鴨志田

何諦めてんだよ。勝てるんじゃないか、そんな裁判？

鶴田

弁護士費用、下手したら100万とかになっちゃうって。ありませんよ、そんなお金。

鴨志田

100万…。(雉本を見る)

雉本

え？ いやダメだよ。

鴨志田

(鶴田に)なあ、もうちよつと詳しく聞かせてよ、鶴ちゃん。もうちよつとでおれ金出しそうだよ。

鶴田

鶴ちゃん？

雉本

気にしないで。なんかトチ狂っちゃったみたいです。

鴨志田

義賊だろ、おれたち。目の前に困ってる人がいるんだぞ。助けてやりやいいじゃねえか。(鶴田

雉本

に)ね、鶴ちゃんもうちよつと聞かせてよ。

やめろつて。傷ついてるんだぞ。塩塗るような真似するな。2次加害になる。

鴨志田

そんなつもりねえよ。助けようとしてるんじゃないか。

雉本

その無自覚が問題だったの。心の傷は金で癒せるものじゃないんだよ。

鴨志田

…。

鶴田

…ありがとうございます。

雉本

いえ。すみませんでした。辛いこと話させちゃつて。

鶴田

いえ。

鴨志田

へっ、お前金が惜しいだけじゃねえのか？

雉本

違う！ 断じて違う。今のは取り消せ。

鴨志田

冗談だよ。

雉本

冗談でも言っちゃいけないことがある。取り消せ。

鴨志田

なんだよ。どうしたんだよ。

雉本

取り消せ。

鴨志田

わかったよ、取り消す取り消す。

雉本

取り消すは1回。

鴨志田

…取り消す。お前は金が惜しくてそんなこと言ってるんじゃない。

雉本

そう。じゃ、鶴田さんに謝つて。

鴨志田

なんでおれが！

雉本

いいから。そういう無自覚が罪になることもあるんだよ。ほら。

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鶴田

雉本

ごめんな、鶴ちゃん。

まじめに。

すみませんでした。

よし。(鶴田に) あの、誰もいないなんて思わないで、鶴ちゃん。

鶴ちゃん？

あ…。

遠くでサイレンが鳴る。

鴨志田

雉本

サイレン…。

なんだろう？

一同、それぞれのデバイスを見るが電波は来てない。

中鳥

雉本

鶴田

雉本

鶴田

鴨志田

何もわからないですね…。

なんだろう。

火事、とか？

煙見えます？

いえ…。

ド田舎だからな！ そういうこともあるん…

突然、ブラックアウト。
10秒ほど暗闇になるなか、サイレンが消えていき、コンピュータが動くような電子音に変わる。
数秒ほどで電子音がフェードアウトし、明転。
一瞬、何もしていない4人の姿が見えて、場面が少し戻ったところから始まる。

鴨志田

最低だな、演出家ってやつは！

鶴田

みんな、見て見ぬフリで…。女の先輩なんか「座長のマンツーマンは効果あるよ〜」なんて言っちゃって…。

鴨志田

共犯じゃんか、それ。

鶴田

だから、SNSで告発したんです。助けて欲しかったし、みんな演劇が好きだからやってるんだ
と思ったし…。

鴨志田

それで？ ぶっ飛ばせた？ その演出家。

鶴田

一定の効果はありましたけど、逆に私が訴えられました。名誉棄損だって。
は？

鶴田

もう戦えません…。

鴨志田

何諦めてんだよ。勝てるんじゃないか、そんな裁判？

鴨志田

弁護士費用、下手したら100万とかになっちゃうって。ありませんよ、そんなお金。
100万…。(雉本を見る)

雉本

え？ いやダメだよ。

鴨志田

（鶴田に）なあ、もうちよつと詳しく聞かせてよ、鶴ちゃん。もうちよつとでおれ金出しそうだよ。

鶴田

鶴ちゃん？

雉本

気にしないで。なんかトチ狂っちゃったみたいです。

鴨志田

義賊だろ、おれたち。目の前に困ってる人がいるんだぞ。助けてやりやいいじゃねえか。（鶴田

雉本

に）ね、鶴ちゃんもうちよつと聞かせてよ。
やめろつて。傷ついてるんだぞ。塩塗るような真似するな。2次加害になる。

鴨志田

そんなつもりねえよ。助けようとしてるんじゃないやねえか。

雉本

その無自覚が問題だったの。心の傷は金で癒せるもんじゃないんだよ。

鴨志田

…。

鶴田

…ありがとうございます。

雉本

いえ。すみませんでした。辛いこと話させちゃつて。

鶴田

いえ。

鴨志田

へっ。お前、まだ昔のこと引きずってるのか？

雉本

え…。いや…。

鴨志田

引きずってるな。でも、雉、あれはお前の武勇伝だぜ。

雉本

そうかな…。

鴨志田

そうだよ。お前は筋を通した。何も恥じることねえ。胸張ってるよ。

雉本

うん…。

中鳥

何があつたんですか？

鴨志田

中鳥

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

中鳥

鴨志田

雉本

鴨志田

鶴田

鴨志田

鶴田

中鳥

鴨志田

中鳥

鴨志田

雉本

てめえ、人の話に首突っ込むなよ。

すみません。あれ、とても自然な入り方と思ったんですけど。

シミュレーションやめる。

いいよ、鴨。おれは大丈夫。

そうか？

随分前のことだし、もう…。

そうだな。

何があったんですか？

てめえ…

鴨。

ちっ。(鶴田に) こいつも昔、同じことしたんだ。だから、よくわかるんだよ、鶴ちゃんの気持

ち。

え？

かつこよかつたぜ。当時はニュースにもなったんだからな。

へえ。

何があったんですか？

うるせえな。それしか言えねえのか？ 内部告発ってやつだよ。

へえ！

(雉本に) いいか？

…(頷いて離れる)

鴨志田

こいつ、おれのいる産廃処理場に来る前はビシッとスーツ着た会社員だったんだぜ。ほら、森友建設って聞いたことあるだろ？

中鳥

ああ、軍国主義の学校建設請け負って話題になってましたね。

鴨志田

それ。

中鳥

で、耐震偽装で叩かれて。

雉本

…その節はどうも。

中鳥

いえいえ、ああいうのは末端の社員にはどうしようもないですよ。なにかも会社次第なんですから。あれですよ、政治案件だから中抜きがひどくて、しかたなくやっちゃったってやつですよね？

鴨志田

よく知ってるじゃねえか。

中鳥

だって、どこも似たようなものです。他人事（ひとごと）とは思えませんでしたよ。

鴨志田

ただ、お前と違うのは内部告発したってことだ。雉は筋を通した。

中鳥

ああ…。

鶴田

でも、傷つくことになった。

鴨志田

…そう。社会的に抹殺されちゃった。会社の内部通報制度を使っても上で握りつぶされるのがわかってたから、マスコミにタレこんだんだ。で、会社が叩かれて、役員の一ひとりと政治家の秘書が逮捕された。だが、ニュースになったのはここまで。その後…

中鳥

犯人捜し。

鴨志田

ああ。簡単に見つかっちゃってさ。ひでえよ。職場で村八分だけ。最初は応援してくれた同僚もとばっちり受けたくないから段々…。で、地下の資料室に異動させられて、毎日何もしないでた

だボーっと。家には脅迫状やら嫌がらせの荷物がワンサと届いてさ。婚約してた彼女にも逃げられるし、踏んだり蹴ったりだったよな、あの頃は。いいことしたってのによ。

沈黙。

雉本 鴨がいろいろやってくれて助かったよ。

鴨志田 何言ってるんだ。兄弟みてえなもんなだから当たり前だろ。あ、おれたち幼馴染の腐れ縁。

雉本 ……告発なんてしなきゃよかったって思ってる。

鴨志田 おい…。

雉本 バカだなんて声が消えないんだよ。

鶴田 ……。私は、お前さえ我慢してりやって何度も言われました。みんなに迷惑かけるなって。いろんな人に。

雉本 おれも、コスパ考えろって。片目つぶってうまいこと生きろって。はは…。

鶴田 (突然ナイフを出して) ぶっ殺す！

一同、驚いて距離を取る。

鶴田 (線路に寄りながら) クソ座長も周りの奴らも、ぶっ殺す！ (雉本に) ついでにあんたの会社

の奴らもぶっ殺す！ どいつもこいつも知ってたくせに！ 知らんぷりしやがって！ (雉本に) あんたは偉い！ なんでこっちが潰されなきゃなんないんだ！ (線路の先に向かって) み

鴨志田

んなぶつ殺す！ くそ、電車来やがれ！
落ち着け！ ナイフ仕舞え！

鶴田

くそ、くそ、くそ…。(広がる景色に向かつて) ふぎけんなー！ ぶつ殺すぞー！ あー！ え

鴨志田

ー！ いー！ うー！ えー！ おー！ あー！ おー！

雉本

なんだよ、それ！？

鶴田

発声練習？

中鳥

坊主が屏風に上手にポーっとしたポーズの坊主の絵を描いた！

早口言葉。

鶴田は発声練習や早口言葉を繰り返しながら落ち着いていく。

鶴田

(息を吐いて笑顔で) 落ち着きました。

鴨志田

すごいね、演劇。

鶴田

すみません、お騒がせして。

鴨志田

いや…。

雉本

ありがとう、鶴ちゃん。

鶴田

鶴ちゃん？

雉本

あ…

鶴田

いいですよ、そう呼んでください。雉さん。

雉本

ああ、うん。

鴨志田

鶴田
おれは？
いいよ、鴨さん。

鴨志田

中鳥
おお！
私は？

鶴田
いいよ、中鳥。

中鳥
やった…え？

一同、穏やかに笑う。

鶴田が空を見上げる。

鴨志田

雉本
へへへ、鶴ちゃんもあれだな、足の無い鳥なんだな。
ああ、自由に見えるけど…。

鴨志田
地上に降りては来れない。でも、おれが思うに、降りられるのは死ぬときだけってちよつと違う
んじゃねえかな？

鶴田
え？

鴨志田
そのためなら死んでもいいって気になったとき、自ら降りてくるってこともあるんじゃねえか？
どういうこと？

鴨志田
ほら、コスパ良く生きろとか、損するくらいなら黙っとけとか、そんなの雉も鶴ちゃんも分かり
切ってたことだろ？ それでも二人は告発した。死んでも守りたいってのがあったんじゃねえの
かなってさ。

鶴田

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

そのためなら死んでもいいと、地上に降りた…。

そう思うけどな。

そんな覚悟なかったよ。鴨が背中押したんじゃないか。

ああ、後先考えねえで。まったく…

いや、鴨のせいじゃないよ。むしろ感謝してる。鴨がいなかったら今頃おれは…

(歌って) 「きみの背中が小さく見える」

…。

「袋小路で震えて見える」

鴨志田が主題歌「風の上で眠る」を歌い始める。

途中から雉本も歌い、鶴田と中鳥がコーラスで加わる。

「道が分からなければ

ぼくも一緒に探してみるよ

一步踏み出すのならば

すこし後からついていくよ

晴れた空もあるのだと

決してひとりじゃないのだと

分かってくれるまで

第3場

あきらめない

それまでぼくらは、風の上で眠る
だからぼくらは、風の上で眠る」

歌い終わり、一同、穏やかに笑う。

遠くでサイレンが聞こえる。

雉本
なんだろ。

鶴田
火事、とか？

雉本
煙見える？

鶴田
いや…。

鴨志田
ド田舎だからな！ そういうこともあるん…

突然ブラックアウト。

暗闇の中、サイレンが消えていき、コンピュータが動いているような電子音が聞こえている。

電子音がフェードアウトする。
明転し、無味乾燥な舞台が見える。鴨志田と鵜野がベンチで静止している。

鴨志田

うう…（起きる）

照明が変わり、夕暮れの無人駅となる。

鴨志田

なんだ？ どうなった？ 何がどうなってる？

鵜野

憶えてるんだね？

鴨志田

は？ なんであんたがいるんだ？ 雉は？ あれ、鶴ちゃんも中鳥もどこに行った？ なあ、何がどうなってるんだよ！

鵜野

落ち着きなよ。どうせ逃げられないんだから。

鴨志田

は？

鵜野

ああ、ここまで何度繰り返したことか。やっとあんたに記憶ができたね。これで次に行ける…。

鴨志田

何わけわからんことを…。遠くでサイレンが鳴ってた。それからどうなったんだ？

鵜野

見せてあげる。

鴨志田

は？ 見せる？

鴨志田

は？ 見せる？

鵜野が合図すると、サイレンが鳴り、爆発音が聞こえ、二人が明るく照らされる。

鴨志田
鵜野

なんだ、あれ。何か爆発したのか？
近くで見る？

また合図すると、雉本と中鳥が登場。
二人は電力会社の社員である。（名札「原発職員」）

中鳥
雉本
中鳥

（来ながら）先輩、早く逃げないと！
先に行け！ とにかくプラントを止める。
もう着弾しますよ！

雉本
中鳥

雉本は原発の運転管理室のモニターを確認しながらスイッチを急いでいくつも切る。
ミサイルが外れるかもしれないだろ。このまま逃げたら200キロ圏内全滅だ。せめて制御棒を
入れる。
早く！

爆発音。
静止する二人。

鵜野

別の角度。

また合図すると、鶴田が役場職員として登場。（名札「役場職員」）

鶴田

（マイクに向かっていているように）ご町内の皆さん、落ち着いて聞いてください。そして、聞きながら逃げてください。原子力発電所に向けてミサイルが発射されました。これは訓練ではありません。すぐに地下室など、密閉された空間に逃げてください。あと数分でミサイルは到着します。繰り返します。原子力発電所に向けてミサイルが発射されました。これは訓練ではありません。すぐに地下室など…

爆発音。

ブラックアウト。

電子音。

鴨志田

うう…（起きる）

夕暮れの無人駅となる。

鴨志田と雉本、鵜野がベンチに座っている。

鴨志田

なんだ？ どうなった？ 何がどうなってる？

鵜野

憶えてるんだね？

鴨志田

は？ なんてあんたがいるんだ？ （気づいて）雉！ あれ、鶴ちゃんも中島もどこに行った？

鵜野

なあ、何がどうなってるんだよ！

鴨志田

落ち着きなよ。どうせ逃げられないんだから。

鵜野

は？

鴨志田

ああ、ここまで何度繰り返したことか。やつとあんたに記憶ができたね。これで次に行ける…。

鴨志田

何わけわからんことを…。遠くでサイレンが鳴ってた。それからどうなったんだ？

雉本

原発にミサイルが撃ち込まれた。見ただろ？

鴨志田

え？ ああ…。

鵜野

（客席方向を指して）海の風がああの山を越えて、放射性物質の雲を運んできた。

鴨志田

じゃ、おれたちは…。

鵜野

そう。すでに死んでいる…のかもしれない。

鴨志田

どういうことだよ？

鵜野

わからないの。何にも情報がないんだから。自分で見て聞いたことの記憶しかない。それだって

鴨志田

いくつもパターンがあるんだから何が何やら…。

鵜野

パターン？

鴨志田

たぶん私たちは死んだんだと思う。私たちっていうか、私たちの元データを持った人間はね。原

鵜野

発が爆発してこの地域は捨てられたんだから。だけど、いろんなパターンがあるの。さつきみた

鴨志田

いにみんな揃って被曝したってパターンもあれば、それぞれが別々に死んだっていうパターンも

ある。

鴨志田

何言ってるんだ。死んだ？ 元データ？ 頭おかしいのか？

雉本

鴨、落ち着けよ。おれも鶺野さんに教わったんだ。

鴨志田

鶺野！？ いつ知り合いになったんだよ！ おまえらいったい…。

鶺野

これは、何かのシミュレーション。

鴨志田

(耳を塞いで) わーわーわー！ おれは聞かないぞ。おれは生きてる。おれは生きてる。おれは生きてる。

顔を見合わせる鶺野と雉本。

ブラックアウト。

暗闇の中、電子音。

鴨志田

うう…(起きる)

夕暮れの無人駅となる。

鴨志田と雉本、鶺野がベンチに座っている。

鴨志田

なんだ？ どうなった？ 何がどうなってる？

鶺野

憶えてるんだね？

鴨志田

は？ なんであんたがいるんだ？ (気づいて) 雉！ あれ、鶴ちゃんも中鳥もどこに行った？

鶺野

なあ、何がどうなってるんだよ！
落ち着きなよ。どうせ逃げられないんだから。

鴨志田

は？

鵜野

これは、何かのシミュレーション。

鴨志田

何わけわからんことを…。止めてくれ。

雫本

おれも最初はそうだったよ。でも、これはシミュレーションだとして考えられない。

鴨志田

ふざけんな、おれは生きてる！

鵜野

：仮に生きてたとして、これがシミュレーションじゃないと証明できる？ 機械につながってA

鴨志田

Iの作る仮想世界を見せられるのかもしれないじゃない。

鵜野

なに「マトリックス」みたいなこと言ってるんだよ！

鴨志田

仮に死んでたとして、本体の記憶や無意識領域までデータ化されて仮想世界にぶち込まれたのか、仮にそうだと。じゃあ、おれは、おれの身体とか、考えてることとか、全部デジタルだ

雫本

ってのか？
そう、かもしれないんだよ。

鵜野

そうじゃないと言える？

鴨志田

言える！ おれには感情がある。今、めちゃめちゃ怒ってる。デジタルに感情があるわけねえだ

鵜野

ろ。
人間の感情は、すべての記憶と外部からの刺激の組み合わせで発動される。だから膨大なデータ

鴨志田

を瞬時に処理するAIに感情が生まれたっておかしくないよ。

雫本

なんでそんなに詳しいんだよ、このおば…鵜野さん！
何万回もやってきたからね。記憶を持ったまま。

鴨志田

：おまえも、なのか？

雉本

残念ながら。おれもずっと待ってた。鴨の記憶が形成されるのをね。

鴨志田

おれの記憶…？

雉本

なぜ、鴨だけ記憶ができなかったのか。シミュレーションシステムに何か意図があるんだとしたら、おれたちは…おれたちの本体は死んでないのかもしれない。

鴨志田

は？ 言ってることめちゃくちゃだぞ。さっきは死んでる。今度は生きてるって。

雉本

そうとしか言えないんだ。何も確実なことはわからないから。もちろん、ただ無闇な希望を持つてるだけかもしれない。それでも、持ちたいじゃないか。…希望を。

鴨志田

は、希望って。なに青臭いこと言ってるんだ？

鵜野

ここが地獄だから。

鴨志田

地獄？

雉本

何回繰り返しても、どんなパターンになっても、結局は原発が爆発しておれたちは死ぬ。おれたちは、これをずっと繰り返してる。

鵜野

控えめに言っても地獄じゃない？

雉本

だけど、珍しいパターンもありましたね。

鵜野

ああ、あんたたちが爆発の後に来たってパターンね。笑える。

鴨志田

なんだ？ 生き残ったのか？ おれたち。

鵜野

爆発の後、こちら辺りは捨てられた。

雉本

50キロ圏内がね。とんでもない放射線量だから。

鵜野

でも、直後はまだ生き残ってる人たちがいるじゃない？ 屋内に退避してて逃げられなかった人

鴨志田
たちも。それを助けに来てくれた人たちがいたの。
おれたちか？

鶉野が合図すると、防護服（タイベック）を来て防塵マスクをした人たち（中鳥、鶴田）が口々に呼びかけながら登場。

中鳥
鶴田
残ってる人いませんかー！
声を出してください！何か音で知らせてください！

二人は何度も呼びかけながら退場。

鶉野
彼らがどうなったかまでは知らない。でも、あの防護服では放射線自体は防げない。そして、しばらくするとまた別の人たちが来るようになった。それがあんたたち。

雉本が回想に入り、辺りを見回す。

雉本
おお、ド田舎だってけっこう家はあるな！ 鴨。鴨！

鴨志田
（まだ回想に入らず）え？

鴨志田は鶺野に促されて回想に入る。

鴨志田

おお。点々とあるだけじゃねえ。向うには集落もあるはずだ。

雉本

こりゃ儲かるな。

鴨志田

よし、作戦確認するぞ。

雉本

オッケー。おれはまず中に入って金目の物を探す。現金とか宝石とか。

鴨志田

よし。その間におれは外でエアコンの室外機を外して、配管と一緒に積み込む。

雉本

最後に天井破って電気ケーブルを切断。1軒につき20分で終了。次の家。

鴨志田

そして、トラックに積めるだけ積んだらウチの産廃場に戻る。

二人

完璧だな！（ハイタッチ）

雉本が静止する。

鴨志田

（鶺野に）火事場泥棒かよ、おれたち！

鶺野

どのパターンでもあんたたちは結局泥棒。

鴨志田

胸糞悪いな。

鶺野

それだけじゃない。

雉本

（動いて）う、頭が…

鴨志田

雉！ ああ、頭が割れる…

鶺野

線量の高いホットスポットはそこら中にある。

雉本
鴨志田

うえええ (吐く)
うえええ (吐く)

雉本と鴨志田は倒れる。

鵜野

早めに意識が無くなってよかったよね。この後、全身から血が噴き出して…結局、死んだ。そしてまたしばらくして来るようになったのは、自殺志願者。

中鳥と鶴田が別々に登場し、彷徨う。

鶴田はナイフを持っている。

鵜野

世界に、社会に、自分に、絶望して…。

中鳥と鶴田も頭痛を訴え、嘔吐して倒れる。

鵜野

地獄。どこまでも、地獄。

回想終わり。

鳥の声が聞こえる。

鴨志田

雉本

鴨志田

中鳥

鶴田

鶴野

鶴田

(起き上がり) こんなこと、ずっと…？

(起き上がり) ずっとだ。

地獄…。

(起き上がり) 正直、私はもういいです。もう、眠りたい。

(起き上がり) 疲れたよね。

こんなことになるなら、あたしは早くここを出て行けばよかった。それなのに、お金がない、勇気がない、ダメな自分はここでこき使われているのがお似合いだって思っちゃって…。ここが地獄だってわかってても他よりマシかもしれないって思っちゃって…。

お姉ちゃん。

鶴田が鶴野の手を握る。

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

くそ。どこのどいつだ、こんなことさせやがってるのは？

とてもわからないよ。

だけど、これがシミュレーションなんだったらそのシステムを作って動かしてるやつらがいるってことだろ？

そいつらが一番にぶっ殺したいけどな…。

そうだよ。くそつたれなシステムだったらぶっ壊しゃいいじゃねえか。

どうやって？

…わかんねえけど。

雉本

鴨志田

雉本

できないよ。おれたちはこのシステムのなかで右往左往するしかないんだから。胸糞悪い。

しかも、たぶんやつらはおれたちを好きだけ動かしておいて、いつでも消すことができる。神様みたいなもんだ。

沈黙。

中鳥

鴨志田

中鳥

元居た世界も地獄でしたけどね。：もしかしたらここは新しい墓地なのかもしれないですね。死んだ人のあらゆるデータをアップロードして供養する電腦墓地とか。ふざけんなよ。

いや、あり得ますよ。それどころか、人間のすべてがデータ化できるなら、マイクロチップを埋め込んだ自分のクローンにデータをダウンロードして生き返らせたりとか。

それ、人間か？

やりかねないですよ。

沈黙。

鵜野

鴨志田

鵜野

私たち、存在していいのかな？

：いいに決まってるだろ。

そう？

沈黙。

雉本　とにかく、鴨にも記憶ができた。ここからは新しいパターンに…いや、新しい地獄かな。
鵜野　ハッピーエンドだといひね。

雉本　ああ、そういう可能性もありますけど。

鶴田　地獄のハッピーエンドってどんなの？

鴨志田　お前ら、何受け入れてるんだよ！

中鳥　あの、ちよつと思っただけですけど、今どういう状況ですかね？　みんなでこの駅にいるってこと

は、もしかして…（皆を見回す）

雉本　…なんですか？

鵜野　早く言っつて。

中鳥　いや、私のシミュレーション通り答えてくれるかなって。

鴨志田　ややこしいな！

中鳥　すみません。ですから、前と同じように駅にいるってことは…（チラっと見る）

鶴田　もしかして今は、爆発前ってこと？

中鳥　そうです！　ああ、気持ちいい！

鴨志田　ぶっ殺すぞ。

中鳥　ああ、それも！　ああ！

鴨志田　てめえ…。

雉本　ちよつと待てよ。今が爆発前ってことはもしかして…止められるってことか？

鶴田　爆発を？

雉本　そう！

鶴野　そんな大それたこと！

雉本　いや、そうなのかもしれない。もしこのシミュレーションに何か意図があるんだとしたら…。

鶴野　意図？

雉本　同じようなこと何万回も繰り返してきたけど、ディテールは少しずつ違ってた。

鶴野　でも、結局いつも死んでたじゃない。爆発して。

雉本　そう。だからつまり、爆発回避の可能性がひとつづつ否定されてきたってことじゃないかな？

鶴野　何難しいこと言ってるの？

鶴田　さんざん試してみたけど全部ダメだったから、違うことを試す段階に来たってこと？

雉本　そう。で、違うことってというのは…（鴨志田を見る）

鴨志田　鴨さんの記憶。

鴨志田　へ？

そう。鴨の記憶という要素を追加して実験は新たな段階に入ったんだ。これからのシミュレーションひとつひとつに、おれたちが生き残る可能性が秘められてるのかもしれない。原発を爆発させなければ。

鴨志田　面白くなってきたじゃねえか。

鶴野　ちよつと待ってよ。あんまり大それたこと言わないで。じゃ、こんなド田舎の無人駅で立ち往生してる小さな私たちに爆発を止められるって言うの？　ミサイル撃たせなくできるって言う

雉本

鶴野

鶴田

鶴野

鶴田

鶴野

鶴田

鶴野

鶴田

鶴野

鶴田

鴨志田

の？ 冗談でしょ？ あんたたち何者？

…。

意図なんてないよ、きつと。それも原発を爆発させないようにだなんて、そんないい人いないって。

つてことは、人間は存在するには値しないってことを証明してるのかもね。

は？

お姉ちゃんみたいになんだかって何もしなければ悪い方に行くだけ。そういう人たちがばかりなんだったら人間は存在しなくてもいいって確かめるのかもよ。完全に消去する前に。なによ、いきなり。だってできるわけないじゃない。

だから何もしないの？ そうやって決めつけて。お姉ちゃん、さっきも後悔してたじゃない。

…。夢見るのやめなさいって言ってるの。これだから劇団員は…

ちよつと！ それ今関係ないでしょ！

なによ！

二人は身体をぶつけ合ってケンカし始める。

おいおい、姉妹ケンカしてる場合か？ やめろ！

男たちが二人を引き離す。

鴨志田 落ち着けよ。怖い姉妹だな。
中鳥 また強制終了されちゃいますよ。
雉本 鵜野さんは生きていたくないんですか？
鵜野 は？ 生きていたいに決まってるでしょ。あんたバカ？
鶴田 お姉ちゃん！
雉本 おれだってそうですよ。…早く静かに暮らしたい。それだけです。でも、このままじゃ…。
一同 …。
鴨志田 だよな。少しでも可能性あるんなら賭けてみなきゃな。雉、可能性あるんだろ？
雉本 うん。低いとは思うけど、でも、うん。
鴨志田 よし。
中鳥 私はけっこう高いと思いますよ。
鴨志田 そうか。よし。
中鳥 いや、なんでって聞いてくださいよ。
鴨志田 ほんとにうざいな、お前。
鶴田 私もけっこう高いと思う。
鴨志田 おお、なんで？
中鳥 ああ！
鶴田 さっきのシミュレーション。爆発の後に来て死んだやつ。なんであれだけが違ったのか。
雉本 うん、おれもそれを考えてた。もしそうなら可能性はグッと上がる。
鶴田 だよな。

鴨志田

雉本

鴨志田

鶴田

鴨志田

雉本

鴨志田

鶴田

鴨志田

鶴田

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

鶺野

鴨志田

鶴田

鶺野

どういうことだよ？

もしかしたら、他のシミュレーションの影響とかがあるのかもしれない。

他のシミュレーションって、どこか他でもこんなことやられてるってのか？

そりゃそうでしょ。なんでここだけだと思うの？

いや…。

もし、たくさんあるシミュレーションが互いに影響しあってるんだとしたら。

どうなるんだ？

世界は変えられるかもしれない。

おっしゃああ！ ってなんでだ？ やっぱり分かんねえぞ。

バタフライエフェクトです。小さな蝶々が羽ばただけで、地球の裏側で竜巻が起こることも

あるって。

は？

おれたちみたいな小さな存在でも何かすれば世界が変わるかもしれないんだ。

なんで？

風が吹けば桶屋が儲かるって言うだろ。

なるほど！ そいつはいいや。

なんでわかるの！？

よっしゃ、ついでにこの胸糞悪いシステムもぶっ壊してやろうじゃねえか。

うん、ただ流されてたってしようがないよ。

そうだけ…

中鳥

あ、あの！

鴨志田

なんだ？ また邪魔するつもりか？

中鳥

いえいえ。ただ、あんまり大それた目標にしないほうがいいんじゃないかと…

鵜野

あたしもそう思う。

中鳥

目標を小分けにしてまずはできることから、手が届きそうっていう目標をクリアしていった方がいいんじゃないでしょうか？

雉本

ああ…。

鵜野

やるじゃない。

中鳥

自己啓発セミナー通ってましたんで。

鴨志田

しゃらくせえんだよ！ やれることをやるんじゃないやねえ。やりたいことをやるんだ。例え死んでも地上に降りたいってことをやるんだよ。

鳥の鳴き声が聞こえる。

雉本

足の無い鳥か。

鶴田

いいね。

鴨志田

よっしゃ、街に戻るぞ。おれたちみんな、街でやりたいことがあるだろ。

鵜野

でも、どうやって戻るの？

鶴田

お姉ちゃん、また…。

鵜野

何がまたよ。電車が来なくて立ち往生してるんじゃない。それをどうやって戻るって言うの？

鴨志田 電車を待たなきゃいい。

鵜野 は？

鴨志田 今までは全部電車を待ってたんだろ？ だったら今度からは電車を待たない。今までと違うこと

やっつてやろうぜ。

鵜野 どうやるのよ？

鴨志田 だから、歩いて行くんだよ。

鵜野 ええ！？

雉本 (線路の先を覗いて) まさか、線路に沿って歩いて行くこうつてのか？

鴨志田 違う。こうだ。

鴨志田は客席方向を向いて、その場で歩き始める。

雉本 なんだ、それ？

鴨志田 (上に向かって) 見てやがれよ、くそつたれ！ これは、シミュレーション返しだ！

雉本 は？

鴨志田 (歩きながら) この世界はシミュレーションなんだろ？ で、おれ達を見てなんだかんだやっつて
る奴らがいる。まずはそいつらのルールをぶっ壊してやるんだ。おれたちの作るシミュレーション
ンを見せてやるんだよ。

雉本 おいおいおい。

鴨志田 鵜野さん！ あんた、さっきまでいろんな場面を見せてくれたじゃねえか。それとこれと何が

鶴田

鴨志田

鶴田

鴨志田

鶴田

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

中鳥

鴨志田

中鳥

鴨志田

鶴田

中鳥

鴨志田

雉本

違う？ たとえ想像でも、おれ達がほんとは見て感じてたら、向うだってそれを見るんじゃないやねえか？ 俺は今、山道を歩いている！

あはは、演劇みたい。

おうよ！ この世が演劇でないなんて誰に言えるよ！ さあ、歩くぞ！

私、付き合う。(隣で歩き出す)

さすが鶴ちゃん！

私は戻って戦う。自分のため、後輩のため。ないがしろにされたまま黙っててたまるか。

だよな。雉、来いよ。

おお！ (歩き出す) おれも街に戻る。(懐を叩いて) この金があれば静かに暮らせる。

ははは、チンケだが、まあいいや。

うるせえ。

よし、中鳥は？

い、行きます、皆さんそうされるなら。

ばか。自分で選べよ。

選ぶって…あの、今シミュレーションしますんで。

ややこしい！ 早く来い。

戻りたくないの？ 中鳥。

だって、私は、どうせ…

ああ、めんどくせえな、自殺志願者は。

中鳥さん、あなたの同僚はあなたを裏切ってますんよ。

中鳥
雉本
中鳥
鴨志田
中鳥
中鳥
鴨志田
鴨志田
鴨志田
鴨志田
鴨志田
鴨志田

え？

金持って謝りに行ったとき言われたこと。私もあんたを売ったっていうのは彼女のウソです。あ

なたを追い詰めたくなかったから言っただけですよ。

なんでそんなことわかるんですか？

おめえはバカか？ 同期のザクロなら当たり前だろ。

あ…。

要はあなたが信じるかどうかです、同期のザクロを。

はい！

よっしゃ、来い！

はい！ (元氣よく歩く)

へへ、さあ、ラスボスだ。

お姉ちゃん、行こう。

だって…

後悔してるんでしょ。このまま地獄にいるより、一緒に行こうよ。

イヤ！ あたし、絶対イヤ！！

ブラックアウト。

電子音。

鴨志田

うう…（起きる声）

夕暮れの無人駅に戻る。
鳥の声。

鴨志田

雉本

（起きて）憶えてるか、みんな？
憶えてる。強制終了された…でも、
爆発してない！

鶴田

雉本

そう！

中鳥

一歩前進だ！

鴨志田

よし、まずは単純に考えよう。さっきは鵜野さんが嫌がった。ってことは、全員揃ってなら行け

鶴田

るかもしれない。もう一回やるぞ。（鵜野以外、また歩き始める）
お姉ちゃん、行こう？

雉本

鵜野さん、お願いします。この先に行けるかもしれないんです。

中鳥

鵜野さん。

鵜野

だって、イヤなの。あたし、歩きたくない。

鶴田

なんでよ、お姉ちゃん！

鵜野

魚の目が痛いの！

一同

…。（バラバラに止まる）

鶴田

何それ…。

鶴野 何それってなに？　そういうデイトールが大事なんじゃないの、シミュレーションって。

鶴田 そう、だね…。

雉本 頼みますよ…。

鴨志田 魚の目が無い設定にしるよ！

鴨野 イヤ。この魚の目は大事な魚の目なの。

鴨志田 おいおい…。

鴨野 何も知らないくせに責めないでよ。あたしはここを出ていきたくて、しよっちゆう駅にきて電車を眺めてたの。でも、どうしても乗る決心がつかなくて、あきらめてウチに戻るけどやっぱり出た出ていきたくなくてまた駅に…。これは、そうやって何度も何度もウチと駅を往復してできた魚の目。あたしの悔しさとか情けなさとか、いろんなものが詰まった魚の目なの。

雉本 それほど出ていきたくったと…。

鴨志田 靴替えろよ！

鴨野 お金ないのよ！

鶴田 わかったわかった。じゃあ、何かに乗っていこうよ。

雉本 乗っていく？　どうやって？　乗り物なんか何も…

鶴田 作ればいいじゃない、シミュレーションなんだから。ちよつと待って。

鶴田は、吊革につかまって電車に揺られている様子。

中鳥 あ、電車！

雉本
中鳥

さすが！
でも、私の乗ってた電車はちよつと違つてました。

中鳥は、満員電車に揺られ、周囲に気を使って両手を挙げる。

鶴田

うまいじゃない！

中鳥

(態勢をキープしたまま) 毎朝大変でした。痴漢に間違われないように気を使って…。

鴨志田

待て待て！ そういうことなのか！？

鶴田

じゃ、電車作りますか？

鴨志田

え？

鶴田

(みんなに) 一列に並んで！ 並んだら、手を私と同じようにして。

一同、腕を体の横で「くの字」に曲げる。

鶴田

私のマネをして。行きますよ、せーの。「どですかでん」！ (と、掛け声に合わせて腕を機関車の車輪のように回す。) どですかでん！ どですかでん！ 出発進行！

一同、「どですかでん」と言いながら一周する。

ブラックアウト。

電子音。

鴨志田

うう…(起きる)

夕暮れの無人駅となる。
鳥の声。

鴨志田

(起きて)憶えてるか、みんな？

雉本

憶えてる。強制終了された…でも、

鶴田

爆発してない！

雉本

そう！

中鳥

一歩前進だ！

鴨志田

いや、電車になってどうすんだよ。

中鳥

楽しかったですけど。

鴨志田

そういうことじゃねえだろ。街に戻るんだろーが。

雉本

ともかく、電車じゃないってことはわかった。

鶺野

あの！車はどうか…？山越えれば町まで行けるけど。

雉本

いいじゃないですか。みんなで乗れるし、車で行きましょう。

鴨志田

よし、車だ。鶴ちゃん、指導よろしく。

鶴田

はい。じゃ、お姉ちゃん…

鶺野

大丈夫。ブルン、ブブー、キイツ。

鵜野は車を運転している態。

鵜野

さ、みんな乗って！

一同

おおく！

鶴田

待って、みんな。お姉ちゃん、これお姉ちゃんとの軽だよね？

鵜野

そう。ガソリン高すぎてあんまり乗ってなかったけど。

鶴田

(みんなに) 軽です。小さいですよ。

鴨志田

オッケー。乗り込むぞ！

助手席に鶴田、後部座席に中鳥、鴨志田、雉本が身を寄せ合って座るといふ態。

後ろ三人

ううう…。

雉本

乗ったぞ！

鴨志田

出発！

鵜野

ちよつと待って。(バックミラーを調整する)

鶴田

ちよつと！

鵜野

ディテール、ディテール。

鶴田

そりゃそうだけど…。

鵜野

じゃ、行くよ！

一同

うわっ！

鵜野がアクセルを踏み、車が走り出す。

その様子を皆で身体を揺らすことで表現する。

また、カーブの時には皆の身体の傾きが一致するようにする。
険しい山道を飛ばしていく。

飛ばし過ぎ！

あ！

キキーンと止まる。

鵜野

行き止まりだ。

鶴田

っていうか、封鎖されてるんじゃない？

(見上げて) こんな高いフェンス使って…うわっ、こ

れ有刺鉄線じゃない。

中鳥

絶対に越えさせないって意志を感じますね。

雉本

道だけじゃない。山の中まで続いてるよ、フェンス。

鴨志田

どういふことだ？

雉本

すでにこの地域は捨てられたってことかも…。

鴨志田

はあ？ 住民に知らせないでか？

雉本 やりかねないよ。ミサイル到達までの時間で全員を避難させられないならいっそのことって…。
鴨志田 ふざけやがって！
鶴田 いや、もつと前に知ってなきや作れないよ、こんなの…。
鵜野 もうひとつの道に行ってみる。

急発進し、山道に行く。

一同 うわああ…。
中鳥 もう歩いて山越えたらどうです？
鶴田 めちやめちや険しいよ。
雉本 フェンスあるし！
鵜野 魚の目あるし！

しばらく行って、急停車。

鵜野 やっぱり封鎖されてる…。
鴨志田 もう道はないの？
鵜野 うん…。
雉本 万事休すか…。
中鳥 あの、一旦、外に出ませんか？

鴨志田

出る出る出る。

一同、外に出てフェンスを見上げる。
その間に鵜野が車をバックで端に寄せる。

鵜野

(車のボタンを押し)自動運転開始。(声色を変えて)かしこまりました。バックで車庫入れします。ピピッ、ピピッ(と言いながらバックで車を寄せる)
とてもじゃないけど登れないよな…。

雉本

(戻ってきて)どうなの？何か抜け穴でもないの？

中鳥

見たところでは…。

鵜野

じゃ、どうやっても出ていけないわけ？

雉本

くそ、このままじゃまた爆発で…。

鴨志田

でも強制終了されてねえ。(上を見上げて)今頃奴ら笑ってやがるぞ。こいつらあきらめるんじやねえかってな。胸糞悪い。

雉本

鴨…。

鴨志田

確かに絶体絶命ってとこだが、なんとかかしてやるぜ。(上に)おい！笑いたきゃ笑え！

鵜野

何？どうすればいいの？

鴨志田

はは、鵜野さん、この短時間ですっかり変わったね。

鵜野

だって、もうあきらめたくないもん。

鴨志田

いいねえ。おれもあきらめたくないねえよ。たとえ死んでもやりたいことがある。やらなきゃならな

鵜野

雉本

鴨志田

一同

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

鴨志田

雉本

いことがある。だったら、みつともなくても最後まであがいてやるぜ。なあ、おれたちは足の無い鳥だろ？ だったら鳥になろうぜ。

は？
何言ってるんだよ？

空だよ！ 空飛んで越えりゃいいだろ、こんなフェンス。

ええ！？

なんだよ？ これはシミュレーションだろ？ さっきは電車だつて作ったじゃねえか。今度は自分たちが空飛んで街まで行っちまえばいいんだよ。

だけど…。

なんだ、やらねえのか？ 確証がないから？ コスパが悪いか？ おれはやるぞ。このままじゃ、おれたちは会社の金掠めてきた泥棒じゃねえか。

…。

ずーつとモヤモヤしてたんだよ。このままでいいのか、いくら黒い金だつてそれを自分のものにしたら同じことじゃねえかってさ。しかもそれは自分だけじゃねえ。雉、お前まで巻き込んでやっちまった。なあ、お前最初から言っただじゃねえか。これは良いことをしてるんだつて。その言葉、本物にしようぜ。

え…。

おめえのトラウマはわかった上で言ってる。でも、おめえだつてモヤモヤしてるんじゃないか？ 気づいてんだろ！ …おい！ おめえはおれが泥棒になつてもいいつての…？

鴨…。

鴨志田

裏金とその使い道、告発してやろうぜ。一緒に。

雉本

…まさか、そのためにこんなところまで？

鴨志田

へっ、そのうちお前から言ってくるんじゃないか。時間稼いだ。

雉本

はは、敵わないなあ。…でも、なんかわかってきたよ。これはおれたち自身が試されてるシミュレーションなんじゃないかな。

え？

鴨志田

鴨、そのモヤモヤってなんだ？

鴨志田

モヤモヤ？ そりゃ、こちら辺（胸の辺り）でなんかこう…

雉本

良心っていうんだよ、それ。

鴨志田

おう。良心。恥ずかしいけど、良心だ。間違いない。

雉本

恥ずかしくなんかない。恥ずかしくなんかないよ…。恥ずかしくなんかないのに、おれはその良心に目を瞑って…。くそ…。

鴨志田

じゃ、お前の良心に基づいて決めてくれ。どうする？

雉本

…また、タレこむ。

鴨志田

…また、傷つくかもしれないぞ。

雉本

そんなときは、一緒にいてくれるだろ？ また。

鴨志田

あたりめえだろ！ 何言ってるんだ、バカ！

雉本

（静かに笑う）

鴨志田

へへ…。

鵜野

良い話。

鴨志田

鶺野さん！

鶺野

ごめんなさい！ でも嬉しくなっちゃって。「良心に基づいて」って裁判所でしか聞いたことなかったから。

鴨志田

何があつたんだよ？

中鳥

ああ、私、死ぬのやめます！ 絶対もう死ぬのやめます！

鴨志田

お前、その段階かよ…。

鶴田

だけど、それ繋がっていく気がするな。

鴨志田

え？

鶴田

足の無い鳥が良心に基づいて羽ばたいたら、地球の裏側で大嵐になるかもしれないって。

鶺野

出た、劇団員。

鶴田

お姉ちゃん！

鶺野

ごめんごめん。うらやましいの。

鴨志田

へへへ。こんな風で桶屋が儲かりや言うことねえや。じゃ、鶺ちゃん。飛んでみるか？

鶴田

え？ いいの？

鴨志田

ああ。鴨、雉、鶺…鳥…。やっぱり鶺が一番じゃないか？

雉本

だな。

鶴田

一人じゃ飛べないよ。

雉本

だからおれたちがいる。一緒に飛ぼう。

鶴田

わかった。ちゃんと受け止めてね。

鴨志田

ああ。鶺ちゃんは一人じゃない。おれたちみんな一人じゃない。みんな飛ぶんだ。

鶴田が舞台奥で走る準備をし、鴨志田と雉本、中鳥が受け止める態勢になり、鶺野が応援する姿勢になる。

鶺野
鶴田

大丈夫？
大丈夫。自分たちを信じるなら。みんなを信じるならね。行くよ！

鶴田が走り始める。

鶺野

(と同時に) 飛べー！

鶴田がジャンプすると男たちが受け止め、鶴田を高く掲げる。

鶺野

飛んだ！

鶴田

飛んだ！ 気持ちいいー！！ もっともっと上るよ！

鴨志田

おう！ フェンスを越えるんだ！

雉本

行けー！

鶴田の頭の方を高くして飛ぶ。

鴉野
一同
（ベンチと屋根を指して）みんな、飛行船が来たよ！
お〜！
乗り込め！

一同はベンチの屋根まで利用して乗り込む。

雉本
中鳥
お〜、高い！ フェンスあんなに下だ！
どこまでも行けそう〜！
風を感じる！ 足の無い鳥はこの風の上で眠るんだぜ！

ベンチと屋根を動かして舞台前まで行く。

一同
うお〜！
街が見えてきた！ あの山の向う。
おっしや！ 町に向かうぞ！
行けー！！ 強制終了するならやってみろ！
そうだ、何度でもやってやる！
見て！ ビルがあんなに小さいよ！ 車も人も豆粒！
上はでっかい空だよ！
何でもできる気がするぞ！ おれたちは何でも変えられる！ これはあれだ！ 噂のあれ！

鴨志田
鶴田
中鳥
鵜野
鴨志田
一同
中鳥

おう、あれだな！

わかるよ、これがあるんだね！

あれ！

あれ！

せーの！

自由だ！！！！

気持ちいい！！

一同、中鳥を見る。

ブラックアウト。

電子音。

主題歌のイントロが鳴り、明転。

一同、飛行船に乗ったまま「風の上で眠る」を合唱する。

後奏とともに照明フェードアウトし、皆の姿が消えていく。

おわり。

『風の上で眠る』参考文献

- ・ 『家族収容所―「妻」という謎』 信田さよ子 講談社
- ・ 『男という名の絶望』 奥田祥子著 幻冬舎新書
- ・ 『地獄のオルフェウス』 テネシー・ウイリアムズ著 鳴海四郎訳 早川書房